明治三十年四月二十四日發行

女鑑

第百三拾號

東京國光社

女鑑第百三十號

目録

髪長媛



義（承前）

吾人、既に、前號に於いて、その二をいへり。今その三をいはん。

三、師弟の親情を欠ぎたることは、これ、教育者の罪多きが如しと雖、畢竟世人が公徳を棄てたる結果のこゝに及びたるものに外ならず。何となれば、至りて愚蒙なるものは、則いはく、吾々の手末、弓弭によりて、上にある人々は衣食するなり、又、師範中學校の如きも、皆地方税を以て設立し、而して、師範より、小學教師を出し之を雇ひて、町村税を給し、而して吾々の子弟を教育せしむるものなり、故に、教師は吾々の雇人たり、何ぞ尊奉するに足らんやと。而して子弟は、之を耳にして、以爲らく、教師は、吾等の父兄が、吾等の爲に金錢を出して、雇へるものなり。尊親せざるも亦可なり。と。その稍、知見あるものは、則いはく、學校の教師も皆、その生計の爲に職を奉ずるものなり。彼の生計の資は、受業料等よ

り成るなり。吾々は學校に入りて學業を受け、その代金を拂へり。何ぞ彼敎師に屈することあらんや。と。而して、その父兄は、常に學校に遠り、その敎師を知らず。故に、之を視ること、路人も啻ならざるなり。これ、果して、父兄のその子女を敎養する所以の道か。これ眞にその子女を愛する道か。而して、子弟、その師を親愛ざるを以て毫も念と爲さず。これ、豈、學を重うし師を尊ぶ所以の道ならんや。

かく言はゞ、世人は、かならずいはん。敎師たる人々の德望なきが多く、威信なきが多くして、概これを尊仰し難きことを如何せん。と。これ、或は、然らんも、未之を以て、一般の敎師を概論することを得ず、且既に、その子弟を擧げて、これが敎養をその人に委ぬるうへは、初より、その人を撰び、その人を信じたるものと謂はざるべからず。而して、その人を尊び信じ、且、之を親愛せざるは、その曲、既に父兄にあり。父兄その曲あることを知らずして、常に、その子弟をして、その慢言を慣れ聞かしめて、遂に、師弟の間の情義を薄からしめ、而して、

其の罪を教育者に諉し、彼の教養其の道を失へりといふは、豈、亦、寃ならずや。吾人は、是に於いて教師たる人の爲に歎息せざることを得ず。たゞ、教師の爲に歎息するのみならす。この世の爲に、德義心の薄く成り來りしことを歎ぜずはあらず。

若、夫、教師たる人の上に就いて言はゞ、亦、一二のいふべきことあり。近來、いづれの學校にも、師弟の間に紛擾の多く起れるは、これいづれの邊より出づるかといふに。多くは、教師の不遜、亡狀、倨傲怠慢、などの欠點あるより出づるものあり、または、其の校の管理上に種々の欠點あるより出づるものあり。要するに、皆教職にある人、及其の務に與る人々の失策より出づるものの多きに居るは、これ、甚慨すべきことゝいふべし。

抑、教育の事は、其の責、實に重大なり。他人の子弟を牽ゐて、將來の成否を卜せしむる大關鍵なり。故に、一日も、其の心を放にし、其の情に任せて、教督の務を曠うすることを得ざるは、皆人の銘肝すべき所なり。而して、子弟をして信

を篤うし、義を重うせしむることは、これ、皆、その度内の事たり。然るを、已の心を推して、人の腹中に置くこと能はず。已の信をして人に孚せしむること能はず、其の力の全體をその職に盡すことを爲さず、自視ること、殆、逆旅羈寓の如き感念を以て、その務に當り、一旦變起り、事生ずるに及び、狼狽して爲す所を知らず、狐疑してその責を引かず、一時彌縫の策を爲し、姑息苟且して、以て恥を忍び、辱を忍びて、以て、事の濟まるを僥倖するに至りては、その陋劣操なきも亦甚しからずや。これをも忍ぶべくは、天下何の忍ぶべからざることかある吾人は、こゝに知る。義の重うすべきこと、教育者に於いて最その甚しきものあることを。あゝ、教育者は、天下道義の根抵にして、人倫の楷範を示す所以の大燈臺たり。この燈臺にして、その本暗からば、世人いづくに往きてか信をとらんや。あゝ、その責に任ずる人、奮うて、その徳行の修養をはかりて、以て世道人心を旣に倒るゝにかへせ。

論説



女子大學校の設計につきて

加茂之滿

頃日、女子大學校の設立を企つるものあり。既に、其の創立會さへ開かれて、その席上には、文部大臣をはじめとして、朝野の名士、數多く集ひて、おのがじヽ、賛成意見を述べられたりと傳ふ。而して、此の設立發起人といふは、多年、米國に在りて、詳に、彼の地の教育を視察し、即、歸りて、我が國女子教育の振はざるを慨き、こゝに、大學校の設立を企てしなりと。吾人は、己が女子教育の爲に、此の壯擧を喜び、厚くその洪勞を謝せんとす。

さりながら、吾人は、現時、我が國の教育の程度、風俗の由來、其の他に顧みて、此の壯擧に對して、一言を試みんことを希ふものなり。請ふ、これをゆるせ。

元より、我が國の教育は、米國の如く、隆盛なりとはいひ難かるべし。ことに、女子教育に至りては、猶、頗、幼稚なり。是より、大に、其の隆盛を計らざるべからず。然

れども、今、にはかに、女子の爲に、特に、大學校を設立せざるべからざる必要に迫れるか、我が國女子の中等教育は、完成普及して、女子大學校を設立すべき機運に向へるか。是、徐に察せざるべからざることなり。試、米國の如く、男子よりも、女子を尊むが如き傾向ある國にては、比較的に、女子教育の隆盛なるべきは、勢の然らしむるところにして、又、我が國の如くならざる所以なり。而も、これを、米國今日の實際に見るに、然らざるものあるにあらずや。而して、吾人の願ふ所は、男子と、女子とを問はず、教育の程度を、一樣に進めんとするにあれども、實際に、必要なるものは興起し、さまで必要ならざるものは、比較的に進歩せざるは、自然の理なり。從來、我が國の狀態に考ふるに、男子は、主として、社會の表面に立ちて、閫外の事業に當り、女子は、多く、その裏面に在りて、內庭の業務にたづさはりて、專、育兒、調食、裁縫などのわざに勤みしなり。現時といへども、尙、從來と大差なく、而して、將來といへども、亦、女子は、斯の如くならざるべからず。社會の事業、繁多なるにつれて、必、男子を助けて働かざるべからざる場合あらんも、そは、所謂內助にして、女子の主とすべきものにはあらず。吾人は、如何に、社會が進歩すとも、如何に、教育が興起すとも、我が國の女子は、決して、歐國の如く、米國の如く、一國の政治にま

で、嘴を容れざれど止まざるが如き勢あるに至らんことを好まず。故に、我が教育の男女の比較は、歐米の如くならざるも、吾人は、深く、之を憾とせず。而して、女子は、專、社會の裏面に在るものなれども、決して、教育の程度、低くして可なりといふにあらず、吾人が、女子教育の、彌進に進みて、今後、益、高尚完美の域に達せんことを祈るは、今日に始りしにあらず、實に、畢生の志願たるなり。冀くは、誤解すること勿れ。

今、我か國にて、大學は、僅々、一校に過ぎず。(今新に、設立せんとするもの一校あれども)こゝに、女子の爲に、特に、大學一校を設立する必要ありとせど、女子教育は、比較的、非常の進歩なりといふべし。現に、米國の如きも、大學は、その數、三百五十七にして、內、女子の入學を許すもの、二百三十七といふにあらずや。吾人は、我が國の女子教育が、眞正に、斯の如く發達したるものならざ、實に、歡天喜地して措かざるなり。然るに、實際、然らざるものあるを奈如せん。試みに、全國に就きて、高等女學校の設あるものを數ふれど、四十三縣中、公立、私立を合せて、僅に、十三校に過ぎず。尋常師範學校に、女子部の設あるものと雖、亦、二十五縣にして、僅に、半に過ぐるのみ。三府には、公立高等女學校、各一、中、東京には、其の他に、尙、同

等、及同等以上のもの、數校あれども、北海道の如きは、一の設あるを見ず。夫、斯の如く、中等教育すら、未、充分に普及せざるに、早く、既に、大學設立を企てんとするものあるを見るは、喜ぶべきが如くして、決して喜ぶに足らざるなり。

吾人は、つねに、我が女子教育の、片時もはやく、高尚完美の域に達せんことを祈りて止まざるものなるに、却りてこのたびの壯擧を喜ばざるものは、何ぞや。女子大學設立のことたる、壯擧は壯擧に相違なきも、あたかも、楷梯を與へずして、屋上に登らしめんとするが如き嫌ありて、女子教育の施設上、順序を失するものあるを信ずればなり。

吾人は、早晩、女子大學設立の必要を見るべきも、今日は、尚、早計にあらざるかを疑ふものなり。大學を設くるの餘力あらば、請ふ、之を普通教育の上に輸し、之を、中等教育の上に注し、然る后、徐に、高等教育の事を計れ。是、女子教育者の任にして、又、目下の急務なり。女子大學を設立するが如きは、女子中等教育の美果を結びて後のことにこそ。

女子教育一斑（三十八）

三輪田眞佐子

第一飲食　凡そ飲食は、味覺に適ふを以て足れりとすべからず。如何となれど、飲食の目的は、獨り、食欲を滿足するためにあらで、身体を養成し、以て生命を維持せんためなれどなり。さあるを、大方の人は、習慣、あるは遺傳などより、專ら、口舌に甘しと覺ゆるものを貪りて、その品質の滋養分は、いかなるものかを知らず。若くは、消化の良非を慮らざるが如し。

されど、苟も、教育に心あるものは、かゝる凡俗の輩と、伍をなすべきにあらず、必ず、飲食の目的に適ふべきなり。すなはち、飲食は身体組織の成分を補給すべけれど、その成分に同化し得る、蛋白質、澱粉質、脂肪質、あるは、酸類鹽類、及び糖分など、種々の物質を含む飲食を求むべきなり。然るを、女子は、習慣か、天性か、唯、おのがじゝ好む二三の食物をのみ常に食するが如し。たとへど、なべて女子は、野菜など澱粉質に富むものを嗜むより、その身体大に肥滿するが如し。おのれ、ゑむし、婦人の病めるものを訪ひしに、醫師は、スープ、牛乳、あるは生鷄卵を用ゐよと勸むれど、患者は、死せんもこれらを好まずと言ふを聞きけり。こは、全く、常食の單一なるため、未だなれざる食物に、食欲の向はざるによらむか。元來、女子は、藥用の外は、酒を

のまざるなど、概ね、男子めきたる食物を避くるは、女性の一端なるを以て、いと賞すべきものと思ふも、程度を過して、身体保養の道に遠からんか、可なる所を知らさるなり。

蓋し、女子の、さまで、滋養に注意せさる所以の原因は少からさるも、元來女子は、宗敎信向の心深きより、ある宗敎の如き、肉食を忌むものに入りては、獸肉を食ひて靈前に出づるは恐れ多し、亦、今日はなき人の命日なるを以て、精進もがなとの心常に因襲して、遂には平日すらに、滋養物を遠け、甚しきは、斷食、あるは、火物、鹽物をさへ、絶ちて食せざるに至る。かゝることの、衛生上に害あるを心とせざるもの多きこそ、この原因の主なるものならん。されど、女子に、かゝる可憐の徳あるは、實に好みすべきものならむも、然も、身は壯健にして、心は淸淨になし、體は強壯にして、而して、なき靈に事ふることそ、信に神佛をまつる道ならん。

わきて戒むべきは、減食と、間食との害なり。そも〳〵、女子の容貌を高尚に飾るはおのづからなる徳性に伴ふものならむも、窈窕の姿にならはやと、食物の分量を減する如きは、淺ましき限りなり。思ふに、人は、その体量、及び勞力に應じて、相當なる分量の食物を食はざれば、とても、身体を強健に維持することを能はさるべし。故

に、わざと、相當なる食物の分量を減ずる如きは、愚の至りなりこれに反して、女子は厨房に居るのみならず、春の日なが、秋の淋しさにつけて、間食する傾きありて、ろがために、腸胃を害するものありとかや。これらは、教育ある婦女の爲さゞる行なるも、兎まれ角まれ、女子社會の弊風なる以上は、感染せざるやう、注意すべきなり。食物は、たとひ、滋養分を多く、且、常に食はんも、能く運動して、消化せしめざる以上は、無益なるを以て、運動を忘るべからず。聞く、人の神經は、主として用ふる局部にのみ働くものなれど、食後忽ち机によりて、文みるごと、事あらんか、神經は即ち腦髓の中にのみ働きて、胃中の消化機能は、充分なる働をなし能はざるが如し。然るに、女子は、針業など、多く運動せざる事をつとむるを以て、運動を實行するは難し。故に、おのれは、言ふべくも行はれざる事を述ぶるを欲せず、即ち、女子は、食前食後など、消化の時刻に當りては、業務の順序をはかりて、なるべく消化を助くべきものを撰びてこれに從事すべし。

又、身の程もわきまへずして、みだりに家財を傾け、美食をなす如きは、學ぶべきにあらざれど、おのれ、は食質、滋養に豐なるを尊び、料理の、消化よきを專らにせよかしと望むなり。大抵、珍味と言はるゝものは、價のみ高からむも、滋養はさまでなき

もの多し。加之、稍もすれば、時ならずして、害さへあるものあり、思はざるへけんや。惜哉、人は目前の感情に制せられて、不易の眞理を考へさるもの少からず。暴食して腸胃を損し、素食して營養を缺き、遂に病を釀すもの、比々皆是なり。深く愼むべきは、げに口腹にこそ。



史談

髪長媛

鹽井ふく子

あかねさす日向の國諸縣の主、牛諸井といふ者の娘に、髪長媛と云ありけり。牛諸井は、曾て、應神天皇の朝に仕へまつりけるが、其の御代の十三年の秋九月に、年老い、齡ひ傾きたれど、御暇を玉はりて、古里なりける日向へ歸り、久しくわはざりし妻子にかしづかれて、老を養ひけるほどに、その娘髪長媛、髪長うなるまゝに、匂ひも色も世にすぐれて美はしう、心ばへもけ高う、身のをこなひざまもやさしう、萬

事度に叶ひけるに、諸井、親ながらかしこがりて、願くは、天皇に奉らまほしう思ひけるほどに、帝、一日、淡路島に御狩遊ばされけるをきゝ、奉りて、よき折りにこそと思ひ立ち、媛をも將ゐて上らんとて、家の子數十人に、各、角のつきたる鹿の皮を着させ、かぢをとらせ、媛をも舟にのぼせて、播磨がたさして漕ぎ上りけるに、天皇遙かに見そなはし玉ふに、鹿どものむらがり、あつまりて、波をおよぎ來るごとくなるに、あやしみ御覽ぜらるゝに、五六十人の舟子供が、鹿の出で立ちしたるにてありければ、いといぶかしみ玉ひて、御使を遣はされ、何者なればさやうなる出でたちして、此處へは上りけるよと尋ねさせ玉ふに、之は、日向國諸縣の主、牛諸井と申す者にて候。かつて、齡ひ傾き、老おとろへ候へど、御いとまを請ひて、古里へ歸りは候ものゝ、朝日、夕日に向ひては、ひねもす都のみおもひ出られ、天皇の御事のみなつかしう忘れがたく候て、日來ながめくらしのみ致し候に、親の身より申すも、をかしう候へど、此の娘、顏も、心もうるはしう候へど、我身が戀ひ奉るのあまりに、せめては、此の娘をも奉りて、君にかしづけ奉らまほしう思ひて、かくは將ゐて上り參り候。あはれ、臣が心をくませ玉ひて、娘を召仕ひ玉はゞ、老のおもひ出、うれしき事の限りになんとつゝしみ奏しけるに、そはよき得物をもとらせけるよとて、天皇も大によ

ろこそれ、伴ひ上られて、宮中にめし入れ玉ひぬ。さてさやうなる鹿の出で立ちして上りけれど、其の舟のつきたる處をぞ、かこの湊とよび、また舟子の事をかこと呼びなすも、此の時よりの事なりとぞ。

さるほどに、諸井がほめたりしも、さることにて、媛、宮中に入れられしよりは、一際玉の光り加はり、今まで咲きほこりたる九重の花もけをされて今色なく、光りもれとりて見らるゝばかりなりけるを、先きに皇后が生ませられし大鷦鷯の皇子、此の媛を、ほの見そめ給ひしより、玉の宮居の奥ふかく、思ほしわづらひ給ひて、御心限りなくあこがれ亂れさせ給ひけるを、天皇きこしめし、いとあはれがらせ給ひ、誠に此の日向の娘、みめより行ひまことにうるはしう、玉にも花にもまさりておぼゆれど、我にはなほ子寶の方こそまさりて目出たう思ほゆるなれ。わがいとほしき王子がさやうにめで迷ふとならば、我は我がめづる子に、そのめでたき者をとらさむとおぼしめし、ある日、ささきにて、とよのあかりをせさせ給ひ、彼の髮長媛をよび出し、天皇の御盞にそへて、おほさゝぎの尊にまゐらせ、媛をもゆづらるゝよしをのたまはせけるに、王子もいとあからみ給ひながら、いといたくよろこびれ給ひて、速に東宮へ召し入れんとし給ひけるに、媛いとおもはづかしうして申しけるやう、御子の后に立

ちかしづかむことは、誠に數ならぬ身にあまりてめでたう覺へ侍べれど、わが父、妾を天皇にかしづけんとおもひたゝせけるを、いま御子の宮に參り侍らんは、親の心にも違ひ、人々のおもひも耻しう、まして、男女のみちは人のはじめにて、百の政はみな閨門より出づるとも申しぬ。そのもと正しければ萬物正しく、本正しからざれど千里の隈までたがひ候とか聞きはべりぬ。まことに源清くしてこそ、流るゝ水は澄むべけれ。まして、御子は神の御子、かりそめにも禮に戻り給はゞ、民皆禮を失ふのもとにもなり侍らん。御子の御志はうれしけれど、父が志もあだにしがたくおもひ侍りぬ。かく御子の御心の亂れ迷はせ給ふは、畢竟いたづらなる妾が身の侍るがもとなれど、今わが身をいさぎやうして、御子がこゝろをも、世をも、清め侍らんものをとて、遂に御殿のうつばりに、玉の緒糸をかけて、くびれ死したるころあはれにもいさぎよき身の果てなれ、御子、みそなはして、いとゞ悔いさせ給ひ、ろの後はさるあやしき思召は、絶ねて思ひたち給ひけりとぞ。

あはれ、あつきが上の小夜衣、重ぬる人さへありける世の中に、さてもめでたき媛が心のおきてにはありけるよ。

阿長

安藤紫光

花は之を賞する人なしとも、之が爲に、その美香を放たざることなく、鳥は之を聞く人なしとも、之が爲に、その妙音を止むることなし。虫や、月や、皆、しからざるはあらじ。實に、天地自然にうけ得たる道は、如何なる時に際すとも、容易に變改すべからざるものなり。人倫五常の道も、またかゝり。君は暴なりとも、臣は忠なるべく、父は慈ならずとも、子は孝なるべく、兄は友ならずとも、弟は順なるべく、友は信ならずとも、我は義なるべし。夫婦の間にありては、たとひ、夫の、我に對する取扱のいかにおろそかなることありとも、婦たるものゝ、これに對するには、なごやかに、人の妻たるべき道を守るべきは、蓋至當のことなり。夫、不義を行はゞ、妻たるものも、また不義を行ふとも可なりとなすが如き似而非道理、禽獸社會にこそは行はれめ。苟も人と人との此の社會には、ゆめ〳〵とり用うべきものにあらず。否、全く行はるまじきものなり。今、こゝに賤しきものながら、よく、この理を證し得べき行状をなしたる女あり。名を阿長といふ。

時は、中御門天皇の御宇、享保の頃、丹波の國小林村に、木匠某といへるものありき。阿長は、その妻なり。二人が中に、二人の女を生みぬ。かゝりし程に、江戸に大火ありて

大方の家居やけ失せしかど、材木の價騰貴し、大工なども、人の少なきをかこつ程なりときこえしかど、某も、かく、片田舎にふすぶり居らむよりはと思ひおこして、先おのれひとり、東の都をさしていでたちぬ。やがて土木の利を得たらむ時は、呼び迎へて、安らかに活計をいとなまむなどゝ、深きたのめもありけむかし。阿長は、ふかくそのわかれを悲しみつゝも、夫の出世すべき緒なりとおもへど、深くたのめをかけて、その出立をぞおくりける。

かくて、いつしか、春すぎ、秋來り、夏往き、冬かへりて、二年三年を經けるが、その間、はじめの程こそ、折にふれての音信もありけれ。後には、門田の稻葉の、そよとだに音せずなりぬ。かゝれど、阿長は、いたく心を惱し、病にやかゝらせたまひし。いたつきにやくるしみ給ふ。近くあらば、篤く介抱もしまゐらせむを、遠く隔れることなれど、いかにもとせむすべなしなど、朝夕におもひつゞけぬ。さるを、そのおもふ人は、人の心のあさましや。榮華にもとの心を忘れ、江戸にありて、おのが好める女を妻として、亦、元の糟糠の妻を顧る意なしと、風のたよりにきゝける時の、阿長のかなしみ、げに、はるけむ方こそなかりけれ。

されど、阿長は、やう／＼におもへらく、われは、一旦嫁して妻となれる身なり。今

夫は、我を捨てゝ、またかへりみずとはいへ。我は、猶妻たり。ことに、二人の女さへあり。徒に、なげきにくづほれてのみやあらむと、即、亦、深くは嘆かず、近きわたりの家の衣服の縫裁洗濯などをなりはひとして、二人の子をやしなひて、細き烟をたてぬ。もとより貧しき活計の事なれど、朝夕の米の代にもさしつかふことなどもありき。されど、阿長は、少しもたゆまず。その庭に、夫のうゑのこしたる一株の櫻あるを、夫の手植といつくしみて、よく培養して、夫を見るが如し。かくてあること、殆廿餘年、櫻は、ます／＼榮ゑに榮ゑ、ともに養ひし二人の女は、既に年たけて、他に嫁するに至りぬ。女子のかよはき身をもちて、廿餘年の間、二女を育てゝあやまりなく、夫は、夫たらざるも、猶、おのれは、妻の道を守りて仕へ、夫の手植の櫻をなつかしむ如き、其のゆかしき心ざしは、げに得がたきぞかし。

阿長は。　櫻町天皇の元文三年四月病みて歿しぬ。あはれ、ゆかしき心もてる人は逝きて、春さびしく、花さくともはゑなしとやおもひけむ。ほどなく、その櫻も、あとをおひて枯れぬとぞ。里の人は、この樹をなづけて、操櫻といひしとなむ。かの東にありし夫、そも、是をきゝて、いかに愧しくやおもひけむ。



家政

たちぬひ

西山たい子

前回(六十五)白無垢のたち方には、圖のひき方、及び寸方等の誤植ありたれど、今一度、此處にあらためものしぬ。

但し袖のなみなるものは、一匹にてたちうれども、ふり袖ものは、今少し多からずばならず、よろしく圖を見てあらためらるべし。

白無垢のたち方の圖

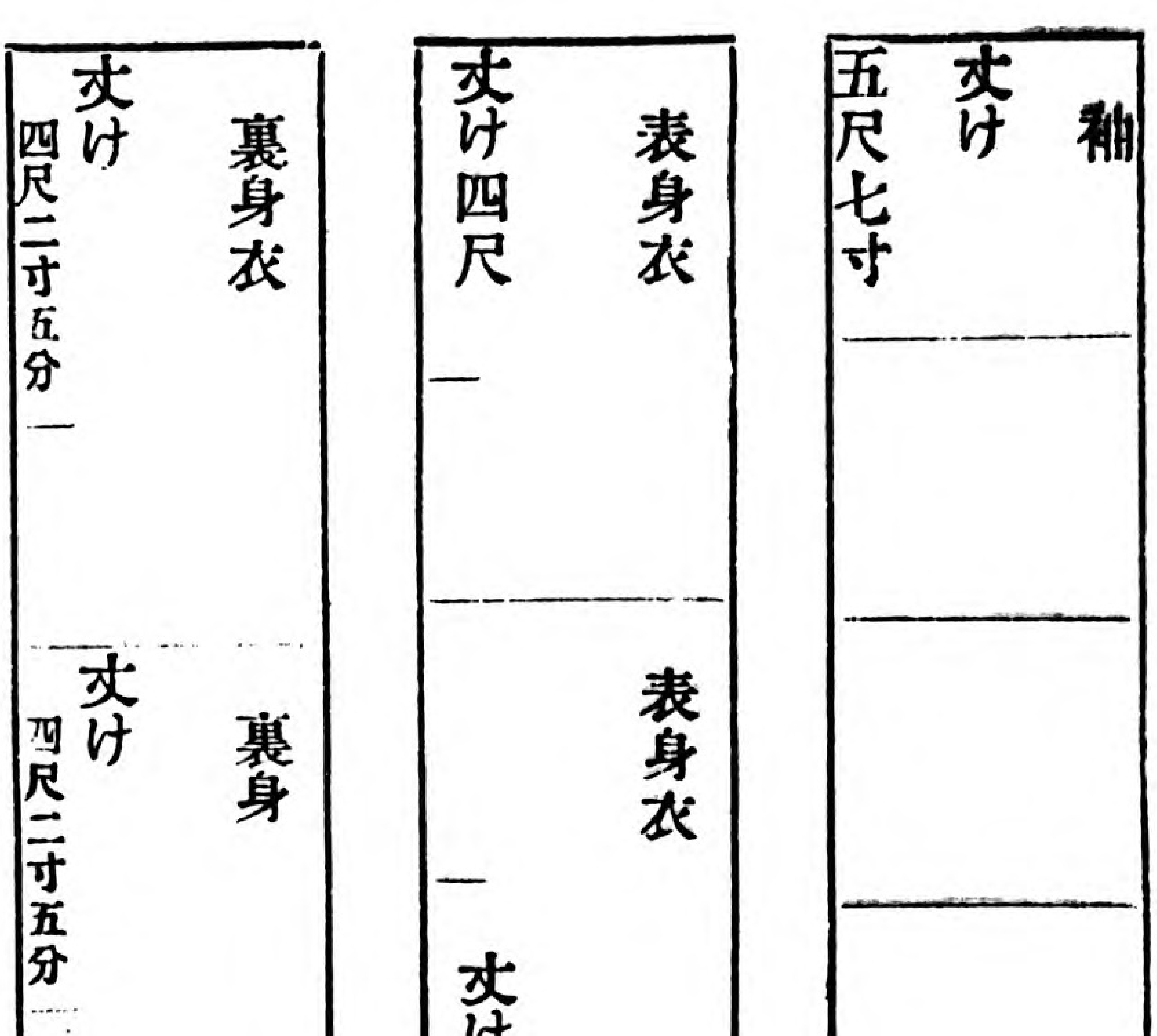


表	裏
袵　丈け三尺六寸	袵　丈け三尺八寸五分

襟
丈け五尺

總計六丈八尺二寸五分

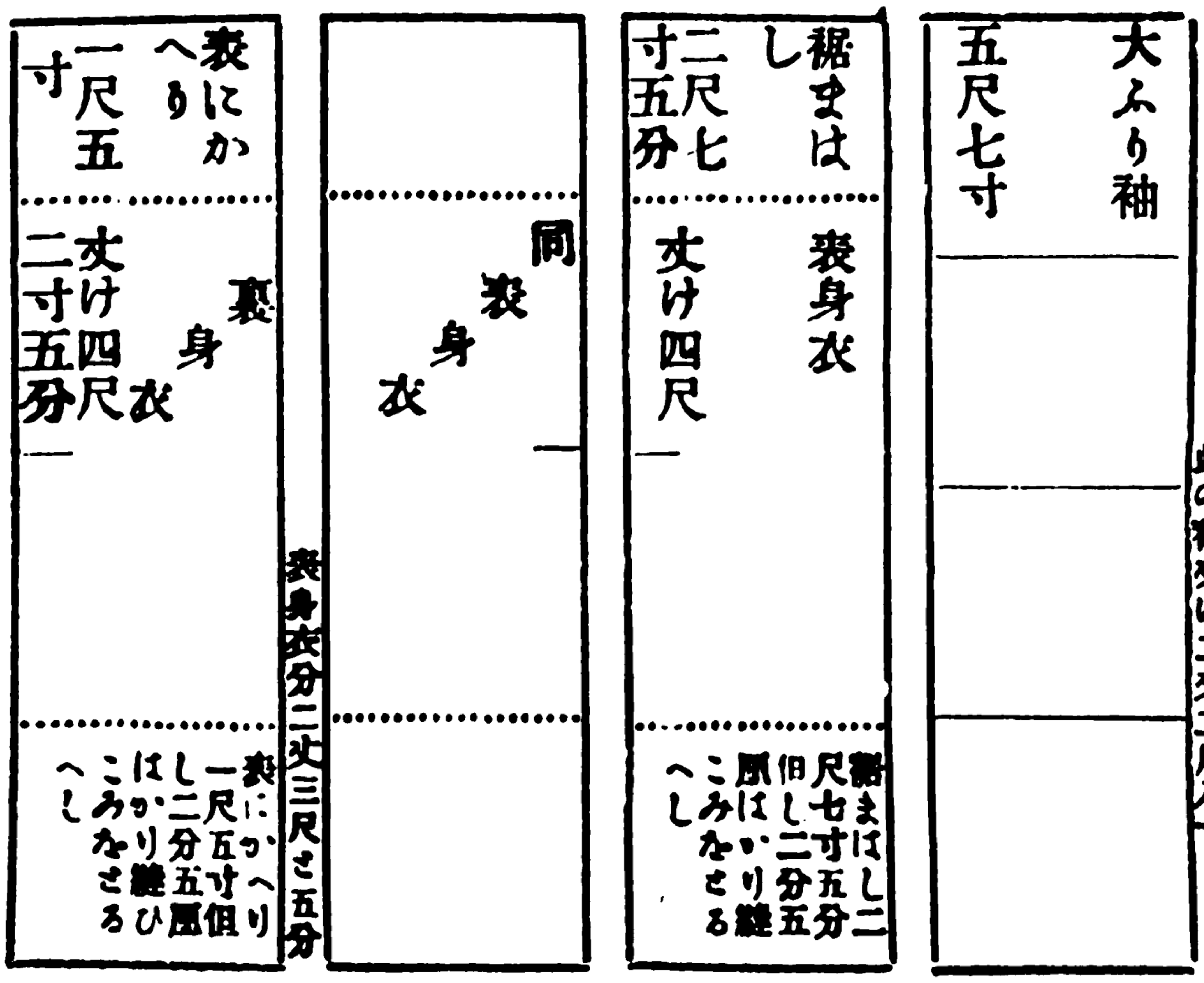
但し、袵をかぎになつもよし。それは次の比翼の所にてものすべけれど、そを見られよ。

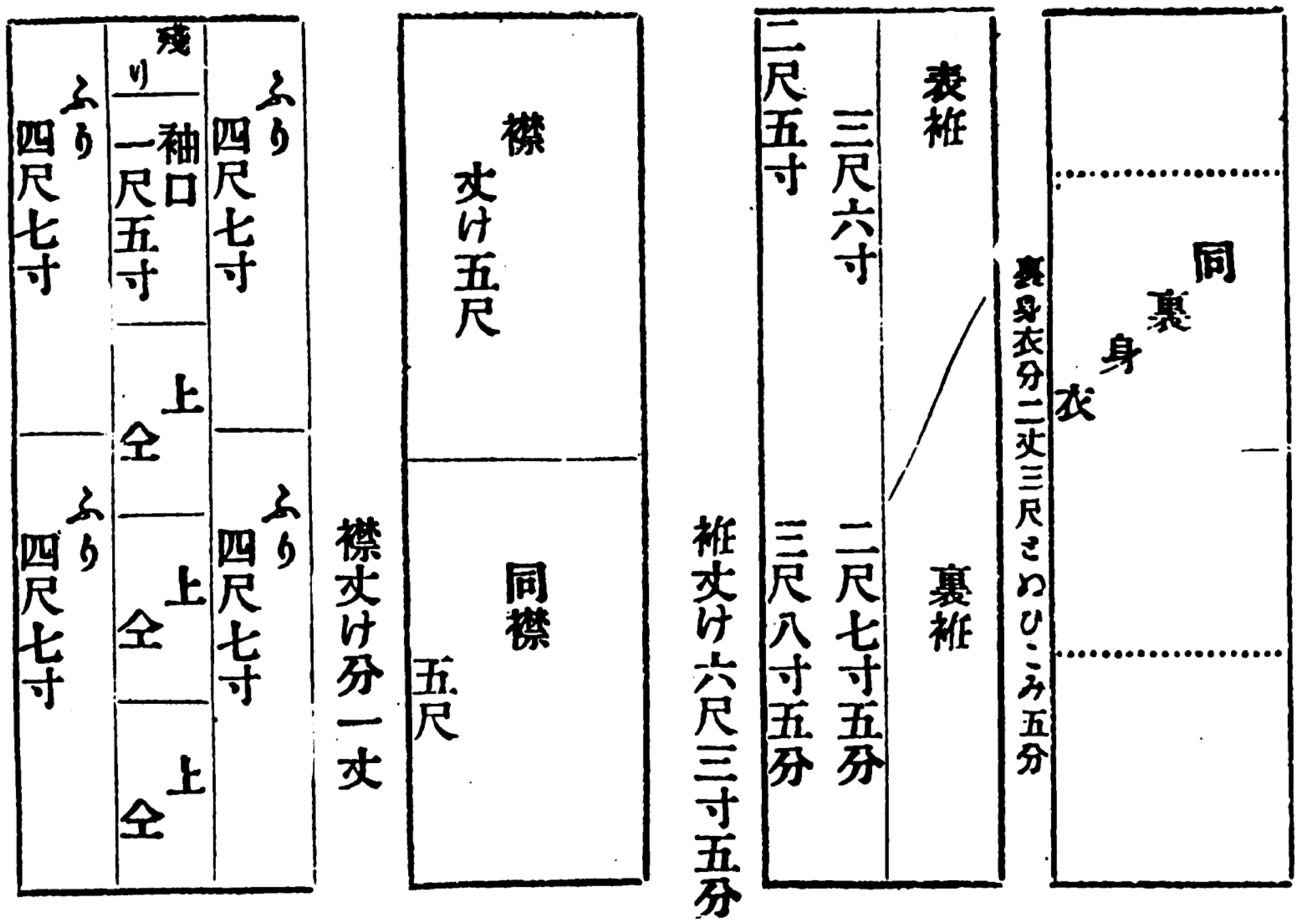
(六十七)白無垢比翼もの丶裁ち方

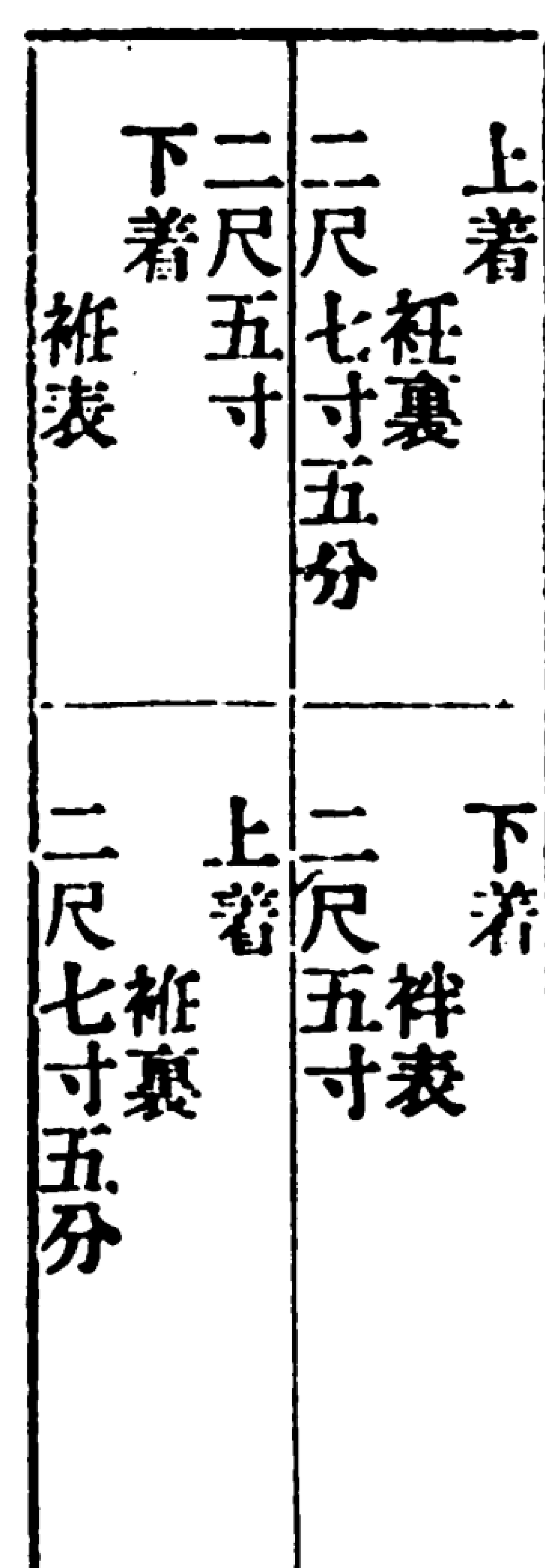
之は、誠は二枚重ぬるを、胴は一枚になしきて、廻りのみを二枚の如く見せしむるものなり。切れの都合によりて裁つものなれど、寸尺等は、切れの様子に應ずべけれど、此處には、三反と一丈ばかりの切れを以て、裁つ法をものすなり。

但し、誠に二枚重ねんには、四反半も要するものなるを、三反と一丈にて裁たんとするなれど、裁ちぐるしき所もあるべし。

ろの圖

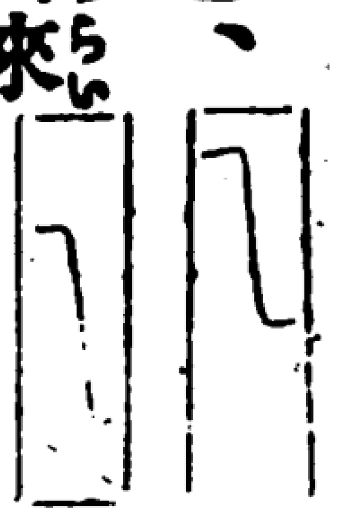






五尺二寸五分

総計十丈

また、此の圖の如くかぎ衽にたてゞ、例へ裏表ある切れにても、差支へなし、もし、さるを、の如くにたつ時は、二つ同じむきの物出來して、きずものとなり、遂に間に合はぬやうなるべけれど、まづ、縦を眞二つに折りたるまゝにて、切らずに置き、すぢかへにたちちがへての後に、縦を切りはなちなど、あやまる事なし。よく〳〵注意すべき事なり。

造花

共立女子職業學校教授
伏見藤三郎

藤

滿開花の造り方　花瓣は、羽二重又は寒冷紗を用ゐて、第七十一圖の如く、甲乙丙三種の形に斷ち、后之を色染すべし。色は「ビオレット」に少しく「マセンタ」を加へたる液にて、花瓣の眞中と、元とを殘して、

第七十一圖



左右の兩端を模糊し、眞中は「オウラミ」を薄く溶きて、少しく黄色味を着け、乾きたれば小の辨鏝にて、甲の花瓣を、表より、左右を窪まし、裏より筋鏝にて眞中を引くべし。乙の花瓣も、甲と仝しく、表より左右を辨鏝にて窪まし、倘表より眞中を筋鏝にて引く。丙の花瓣は、乙と仝し樣にすべし（總て何の造花にまれ花瓣は必ず布片を疊みたる上に載せて鏝をあて、鏝は少しく熱して使ふべし）花瓣の着けかたは、前號の蓮華草と仝しく、乙の花瓣の中部に、丙の花瓣を向き合せて夾み、　之と甲の花瓣の内部に、又向き合せに着け、之に萼を着く。萼は女鑑第百十九號に示したる櫻の萼と仝じ樣に作り、その先端を少しく「ビオレット」六分、茶粉四分の割にて溶したる色にて模糊すべし。萼の柄には眞鍮の針金を添へて少しく長くし、その上に青紙を卷く、この柄より萼にかけて、

薄糊を引き、之に綿を極く細かく刻みたるものを一面に薄く着けて初毛の如くすべし。

半開花の造り方　總て、滿開花と異りなく、唯鏝のあて方は、甲乙丙の花瓣とも、皆滿開花の乙の如くすべし。

蕾の造り方　絖、又は雁皮紙、或は薄美濃の礬水引にてもよし、女鑑第百十九號に示したる梅の蕾と全じ樣にして、少しく長く造るべし。莖、其他は滿開花と仝じ。

以上造りたるものは、實物を見合して、好みの總子に仕上くべし。はじめに蕾を二十ばかりつけ、夫より半開、滿開を適しき配りに、總子の先を繁く、漸々に元をまばらに着け、眞には、鐵の針金を入れて、上に青紙を卷き、莖柄と仝じく、綿の刻みたる初毛を着くべし。

葉の造り方　葉は、寒冷紗を、「オウラミン」七分「クリン」一分五厘「マセンダ」五厘の溶液に、明礬少許を加へて染め、實物を見合して適宜の形に斷ち、后「マセンダ」を薄くして、薄赤く模糊し。針金に青紙を卷

第七十二圖



きて葦の裏より着け、葉柄とす。筋鏝にて葉に實物の如く筋をつけ、筋と筋との間は、裏より瓣鏝にて膨味を着くべし。枝には、其に竹の削りたるものを入れて、上に美濃紙の「カシトラバル」にて染めたるものを卷き着け、適宜の處に以上の花總子、及若葉を着くべし。第七十二圖參照

だいどころ

鷄の油煎方

鷄を拵へ、其上肉を薄く大片にきり、食鹽と胡椒を、能程に肉にすりつけ、米利堅粉を塗し、之に、鷄卵の黄身をぬり、其上にパン粉を附け、油煎鍋に牛脂肪を沸し、沸きたる時前の肉を投れ、四五分間油煎たる後引返し、尙わぐる事二三分間にして、薄褐色になりたれば、洋紙の上に取りソースをかけて用ふべし。

鱒の油煎方

鱒の鱗を去り、腸を取り、三枚におろし、肉を二三寸位にきり、冷水にて洗ひ、能く掛ひて皿にとり、次に、鷄卵を溶きてよくかき交ぜ、此中に切身を投れ、むらなく塗し、之を米利堅粉、又は麵麥粉の中に投じ、其粉の魚につくだけ、成るべく厚く衣を被せ、食鹽を加へたる牛の脂肪にて油煎るべし。但し魚肉は、內面を先にして、脂肪の中に投れ、其薄褐色になりたる時、肉匙を鍋の底につけて魚の下に投れ、注意して皮付の方、底にふるゝ樣反して、三四分間餘り強からざる火にて油煎るを佳しとす。

鱸の油煎方

鱸を油煎るには、新鮮らしきものを撰み、能洗ひ、

鱗を去り、三枚におろし、能程にきり、前の如く、鶏卵、米利堅粉、麵食粉等を塗し、沸騰したる牛の脂肪の中に投じ、褐色になるまで油煎、金杓子にて洋紙の上にとり、暫時にして、皿に盛り、洋芹の若芽を二寸位にきりて妻となし出すべし。但し醬汁を用ふるを佳しとす。

鰈の油煎方

鰈の油煎方は、前のおげかたと格別違ふ所なきも、鰈少なれば、鱗と腸を去りたる儘、全身にて油煎べし、大なる時は、骨を去り、肉のみを、前と同様に油煎るなり。



日本文典（二十九）

鹽井正男

副詞の中には、かねても記したる如く、なほ形容詞より成るものありて、そが中には、また、動詞より成れる副詞と同様に、さま〳〵の形態あり。

その一は、例へば

海原にうきねせん夜は沖つ風
いたくな吹きそ妹もあらなくに

（萬葉集）

久しくも戀ひわたるかな住の江の
　岸に年ふる松ならなくに　（後撰集）

の「いたく」「久しく」の如し。「いたく」は「甚し」といふ形容詞の連用の格にて、「久しく」は「久し」といふ形容詞の連用の格なり。その他にも、

よく父母の教へを守る。

老いたる人のいふ事など、あしく聞くべからず。

疾く行き、疾く歸へる。

雲はやく飛び、風強く吹く。

山高く聳え、水清く流る

鳥遠く飛ひ、魚深く潜む。

など、常に云ふにて知るべし。斯の如く形容詞の連用の格は、副詞として用ひらるゝなり。

その二には、れなど形容詞をうちかへして、副詞となれるものあり。例へば、

唐衣出でうつ音の疾く〳〵と
　山彦さへも急ぐなるかな

の「疾く〳〵」の如きものにて、これは「疾し」といふ形容詞の連用の格なる「疾く」を重ねたるなり。なほ、此の類には、

よく〳〵思ひて見れば、初めの我が心は誤りなりき。

よく〳〵謹みたまへ。

などいふ「よく〳〵」も、「善く〳〵」にて、「善し」といふの形容詞の連用の格なる「善く」を重ねたるなり。さる故に、「ねんを入れて」といふやうなる意を有するなり。

これは、形容詞の連用の格を重ねたるなれど、また、他に形容詞の語根のまゝを重ねたるあり。

例へば、萬葉集の歌に、

　たか山にたかべさわたり高々に
　　わが待つ君を待ち出でんかも

の「高々に」は、「高し」といふ形容詞の語根（たか）を重ねたるなり。なほ、

　はやはやと急がせやる。

などいふにても知るべし。

副詞には、なほ音響をあらはす詞なり。例へば、

　から〳〵と大聲あげて笑ふ。
　あはれに悲しきとて、さめ〴〵と泣き給ふ。
　戸をはた〳〵とたゝく。
　ものゝあし音、ひし〳〵と蹈みならして、後より來る心地す。
　風そよ〳〵と笹原を吹く。

なほ、その他にも、かゝる音響をあらはす詞なる副詞は、いと多く、一々擧ぐる要もなからむ。

斯の如き有様にて、副詞は、もとより副詞なるもののみならず、名詞より、動詞より、形容詞より、さま〴〵の形態にて、副詞と成るものあれば、副詞は、極めておびたゞしきものなれど、此處には、僅に其の一二をあげたるにすぎず。

接續詞

これは、語、句、節の間に入りて、その前後の語、句、節をつなぐ詞にて、例へば、

　山また山、谷また谷を越えゆく。
　書を讀み且つ文を作る。
　霞も立ち、花も咲きぬ。されど、風はなほ寒く身にしむ。

などいふ時の「また」「且つ」「されど」の如きものにて、或は語と語、或は句と句、或は節と節との間に

立ちて、これをつなぐ詞なり。

この接續詞にも、また副詞の如く、本より接續詞なるものと、他の類の詞より成れるものとあり。本より接續詞なるものは、前の例にあげたる中にて、「また」「且つ」の如きものにて、その他にも、

　夢さむれば、すなはち夜はあけたり。

の「すなはち」の如きあり。

他の詞より成れるものは、動詞より、或は動詞に助辭を添へて成れるものにて、例へば、

　萬葉をはじめて、拾遺及び金葉集に至るまで。（奥義抄）

の「及び」は、動詞より成れるなり。動詞に助詞を添へたる接續詞は、

或ひは　されば

されど　されども

然らば　さかれば

かゝれば　かゝれど

しかれども　さかるに

并びに　隨ひて

依りて　就きて

などの如きものにて、なほ他に多かるべし。「或ひは」は、「ある謂ひは」の約まりたるものにて、「されば」は、「さ有れば」の約まりたるものなり。其の他は、推して知るべし。皆動詞に「は」「ば」「て」「に」「ど」「ども」の如き助詞を添へて成れる接續詞なり。

接續詞の「或は」を、副詞の「或ひは」と混同すべからず。「馬或ひは牛」「花或ひは月」などいふ時の「或ひは」は接續詞にて、「或ひは然らむ」などいふ時の「或ひは」は副詞なり。此の區別、よく〳〵見わくべし。同じ詞にても、用ゐざまによりて、自其の類を異

にするなり。ろれらの事は、後にあつめて云ふべし。
これ等の中にて、古書より一二の例を擧ぐれど、

かの他戸の皇子、内麻呂にれはせて、この惡馬に乘らしむ。されど、内麻呂、この馬に乘りたまふに云々(今昔物語)

力を盡くしたる事少からず。まかるに、祿いまだ賜はらず。(竹取物語)

きゝもらし、見及ばぬ所もあるべし。依りて、古今後撰のあとを改めず、五八のともからを定めて云々(新古今集序)

散ることは春の花にもならひにき
　されど紅葉は色まさりけり(拾玉集)

河内の國、高安の郡にいき通ふ所いで來にけり。さりけれど、このもとの女惡しと思へるけしきもなくて、出しやりけれど、云々(伊勢物語)

その他は、推して知るべし。
また、接續詞には、副詞に助詞を添へて成れるもあり。例へば、

されど、度々鞭をうち給ふに、馬なほ動かず。さて、庭を度々打ちまはして、下り給ひにけり。(今昔物語)

かくて、内大臣も、身を捨てゝ、公につかへまつり給ふ事限りなし。(今昔物語)

等の「さて」「かくて」といふ如き類にて、「さて」は副詞の「さ」に助詞の「て」を添へ「かくて」は副詞の「かく」に助詞の「て」を添へて、接續詞と成れるものなり。
また、代名詞に助詞を添へて、接續詞と成れるものあり。例へば、「そも」「そも〳〵」などいふ類なり。事物の代りに用ふる普通代名詞「ろ」の下に、助辭の

「も」を添へたるなり。「そも〳〵」は、それを重さねたるのみ。

斯の如く、數多の形態のものあるのみならず、なほ、さま〴〵と結び連ねたる詞より成れる接續詞あり。例へば、

かゝる間、　かゝる程に、
こゝに於て、　この故に、
しかる間、　さる程に、
しかりと雖、　かゝりけれど、

等の類にて、古書に其の例を尋ぬれど、

かくて、内大臣も身を捨てゝ、公につかへまつり給ふ事、限りなし。しかる間、大臣、身に病ひを受け給へれど、　天皇、大臣の家に行幸して、病ひをとふらはせ給へり。(今昔物語二十二)

さもむつび給はぬをねたしとなん思ひける。かゝる程に、彼の家あるじ、大貳に成りぬ。(源氏蓬生巻)

漢文學講義（五）

大林弘一郎

三、水戸烈公　豐田亮

豐田亮、字は天功、松岡と號す、水戸の人、元治元年歿す、年六十。

公姓源、諱齊昭、字子信、號景山、又號潜龍閣、小名敬三郎、武公第三子也。天保五年甲午、秋、公以太祖山陵荒壊、臣民悲慨、故建議于幕府、欲及二千五百年期(自太祖辛酉元年、至天保十一年、歳數實二千五百年也)圖其修復、以祈實祚無窮、武門昌熾、蓋繼義公之遺志也、議格不行。

十二年、辛丑、秋七月、公奉義公遺志、經營學校、

使諸臣議所嘗祀之神、衆議紛紜不決、公曰、道之大原、出於　天祖、然　天祖　天子祖、至尊無上、人臣安得論分而祭之、冀　天祖之大業、留威靈於茲、土者、武雷神也、宜建鹿島之祠、明唐虞三代之道、爲君臣萬世之師者孔子也、宜營聖廟、乃造記明言其義、撤第三郭士大夫宅、剏學校、名曰弘道館、如文武禮樂射御兵法、銃砲、操練、醫學、數學等、各建館設場、凡所以使諸人修道藝務實用者、其經畫條理、井々乎大備矣。（烈公行實）

この文は、烈公行實といへる書の中より、烈公の、神武天皇の御陵を修復せんとせしことゝ、弘道館といへる學校を建てたることゝの二ケ條を抄節したるなり。

水戸の烈公の傳記は、他にも種々の書に出でたれども、この篇は、水戸の史臣の記したるものにして、その事を記すこと、最、意を用ゐたるものなれど、簡にしてよく要を得たるものなり。文久の頃、板に刻みて世に行はれ、また、近頃、維新史料の中にも收めて、活刷せられたり。

烈公とは、謚號にして、水戸藩主德川齊昭公の事なり。公の姓は、源の朝臣、（朝臣といへることにはいふべきことあれども後に姓氏の事を述ぶる所にていふべし）諱とは、忌み敬ふべき名といふことにて、臣は君の名を唱へず、子は父の名を唱へず、敬してこれをさくるなり。即、齊昭といへる名は、水戸の臣下の忌むべきものなり。すべて子の父の行狀傳記を書するにも、君の事を記するにも、必かく、諱は云々と記すが常例なり。字は子信と云ひ、景山と號し、又潜龍閣とも號したり。

潜龍とは、龍の潜伏して居る意なれど、公の公子たりし時より、既に立ちて藩主たるべき人なりしことを知るべし。少時は、敬三郎と稱せり。父は武公、名は、治紀といふ。公の兄哀公齊修薨して嗣なかりしかば、公封を襲ぎたりといふ。

天保五年の秋、公　神武天皇の山陵、即、畝傍山東北の陵の幾百年來修復を怠り荒れ果てゝありしを、深く悲み、且、臣民の悲み慨むもの多き故を以て、書を作り、幕府の老中、大久保加賀守に寄せて之を論じ、天保十一年、即、紀元二千五百年を以て、山陵を修め、　皇統の無窮、幕府武運の長久を祈らんと請ひしかど、加賀守より、幕府は、山陵に手を附けざる深意なれど、事叶ふまじとて、遂にその議を用ゐざりき。初、義公光圀（徳川家康の第十一子頼房の第二子）深く尊皇の志を懐き、大日本史を修し、又、山陵の荒廢を歎きて、神武陵を修復せんことを計り、朝廷に請ひて、之を修めんの志ありて、元祿七年其の臣森尙謙に命じ、その書を草せしめたり。然れども、時未至らずして、その書は上らずして止みきといふ。烈公その遺意を繼ぎて、之を幕府に請ひしなり。然るに、また行れず。公、尙、止まず、自修復の計畫をなし、もし命のらでかくせんとて、その圖式をも調製し、其の臣藤田東湖等をして、地形の實状を探撿せしめたりきとぞ。

山陵修復の事を言ひ出したるは、五代將軍綱吉の時に、大和の細井甚藏といへる人ありて、その弟細井廣澤は、柳澤吉保に仕へて、江戸にありしかば、これによりて、廣澤より柳澤に說き、吉保之を將軍に請ひて、遂に山陵を修復したり。その後、

猶未知るべからざるものもあり、下野の蒲生秀實、獨身その實地を探りて、山陵志を著し、柴栗山の如きも、神武陵を拜して、その荒廢を歎きたる詩あり。その他、國學者中には、之を歎きたるもの多し。

同十二年の秋、公、義公の遺志をつぎて、學校を經營したり。經營とは、經はをさめる意なり。營はいとなみつくらふことなり。經營の字は、古くより運用せる文字なり。經レ之營レ之などゝ用ゐたる古き例あり。さて、公のこの學校を建てしとき諸臣をして、學校に於いて祀るべき神を議定せしめしに、衆の議論まち〳〵にして、決せざりしかば、公決斷を下して曰はく、この人の履むべき大道人倫の大本源は、かしこくも、我が　天祖天照大神より出でたり。大神の大御言に、寶鏡を視ること猶吾を視るが如くせよと仰せられたるは、これ人子に孝を敎へさせ給ひしなり。また、この國はわが子孫の王たるべき地なり。寶祚の隆えまさんこと天壤とともに窮なかるべしと仰せられたるは、これ人臣に忠を敎へさせ給ひしなり。この忠孝の二つの大寶訓を垂れ給ひ、而して、衣食の源を開き洪澤を民に施し給ひし、御道德を仰ぎ奉れは、必敬祀し奉るべき御神にましませども、これは、かしこくも、　天皇の御先祖にまして、至尊この上もなく尊き御神なれど、　天皇のいつき祀り給ふべき所にして、人臣たるものゝ、分を踰えてみだりに之を祭り奉ることを得べきことにあらず。安得とはいかでかえかすることを得んとの意にし　、則、反語なり。天祖は祭ることを得ざれども天祖の大業を助けて、忠勤を盡し國の内

の兇暴のものを平け、皇孫の安くこの國を治したるは、すなはち、武雷神の勲功にして、この神は、常陸國鹿島郡鹿島郷に鎮座まします鹿島宮これなり。すなはち、この神は永く威靈をこの土に留めし神なれば、之を祭り鹿島の祠を建つべし。また、支那の學問の我が國に來りしは、いと古く應神天皇の朝に貢献せし論語の如きは、彼の魯の太夫たりし孔丘、字仲尼の言行を志るしたるものにて、彼の國の道とし教とする所の忠孝の道を述べ、而して、その旨は、むかし、陶唐氏帝堯、有虞氏帝舜、及夏、殷、周三代の間にも行はれ來りし道にして、我が　天祖の開かせ給ひし御教の旨にも、よくかなへる所ありし教に、應神天皇の朝にも、これを採用し給ひ、且後には天下の臣民にも、之を修めしめ給ひて、今は、その善き所のみ、我が國に行はれ、而して、之を研究發明して教を立てたる孔子は、才識も人に秀でゝ、天下萬世の下までも、師表となるべき聖人となりたるものなれば、彼は、大に道教に功ある人なり。宜しく之が為に、聖廟を營すべしとて、乃自記文を作りて明にその意義を述べたり。而して、水戸城中の第三郭内にありし士大夫などの邸宅をとり拂ひて、こゝに學校を建てゝ、名を弘道館とつけらる。弘道とは、即人道を弘むるといふ意にして、人たるものは、よく人たる道をふみ行ひて、之を日用の行事に施し、この道を弘め大にして、天下をして、みな、人道を行はざるものなからしめんことを務むべしとの深意をこめたるものなり。その意は記文の中に、くはしく言へり。さて、この學校にては、藩中の士人の子弟を教養し、文學、武藝

禮式、雅樂、射術、馬術（御とは、馬を操御する故にいふなり。）兵法、砲術、操練、醫學、數學等にいたるまで、こと〴〵く科を分ち、館を建て、各〻の場を設けて、諸人をして道義藝術を修業し、實用を主とし、空論をさけしめんとする所以の方法は、まことによくとゝのひ、その條理正しく、經畫井々乎として大に備れりといふ。井々とは正しくとゝのふことを形容したる詞にして、乎の字は助字なり。

かく、烈公は、敬神の心厚く、國を治め、道を弘めて、天下に先ちたりしかば、その一藩の人士はみなその風になびきその德に歸し、且名節大義を重うするもの多く出で、四方の諸藩は風を臨みて、之を仰ぎ崇ばざるものなく、天下の人士をして水戸を景慕せざるものなからしめたり。まことに近世の英主とやいふべき。



世の中にたえて櫻の
なかりせば
春の心はのどけからまし



女訓（藤樹先生述之）

赤堀又次郎寄贈

これは、前號に載せたる琴のくみと仝し寫本よりぬき出せるなり。

男女の道、天地に法り侍る。天は地の外をつゝみ、其の性すくやかにして、元亨利貞の四德を以て萬物をはじめ侍る。男は是を法とし侍るに依て、仁義禮智の性にしたがひ、外を治め、家を齊へ、義を以て妻をひきひ侍となん。地は天の中に居て、其の性順にして、天の始る所にしたがひて、萬の物を生育し侍る。女は是をのりとし侍るゆゑに、家の中に居て順從を事とす。舅姑にしたがひつかへ侍る事父母の如くして、正しき道を以て夫にしたがへひつかへ子孫を生育し侍るとや。扨二心なきを要とす。然る故に、男女物を取やりする時は、手にて取かはさず、下に留て渡とや。門を出る時は、面を掩ひかくし。夜中あるく時は火をともし侍る、火なければ、用ありてもありかずとや。男よそへ行、留守などし侍る時は、化粧をせずとや。是皆二心なき本性をやしなひ、疑をまぬかるゝ道なり。如此ならざれば、人にあらずとなん。人にあらざる事は、とりけだものなるべし。人の形をうけながら、とりけだ物となるべ

きや。戒よく〳〵。

臼ひき歌（盤桂和尚作）

こも亦女訓のつぎに記したるなり。そがまゝを。讃州高松にれいて、盤桂和尚此の歌を作りて、下々臼ひきうたにうたはせられしなり。その時の國の守より御仰によつてなり。

不生ふめつの此の心なれど地水火風はかりのもの。
かりの火宅に心をとめてわれともやして身を焦す。
つらき浮世とうらむるひとは夢に心をくるしむる。
昔れもへど夕の夢じやとかくおもふは皆うそじや。
よきもあしきも思ひし事はおのが此身の有ゆゑに。
冬の比しも悦びたく火なつの來るはどあらいやゝ。
夏の頃しも戀しき風も秋のはてぬにはやあくむ。
人に敵はもとないものじやせひを争ふおのがなる。
因果れきせん我なす事としらでなすまひ身の仇を。
年は寄りても心はよらぬいつも變らぬこのこゝろ。
あくをつくれど心がおにじや別に地獄はなき物を。
生れ來りしいにしへとへどいつも思はぬ此こゝろ。
きたるごとくに心をもたど直に此の身かいき如來。
をしやほしやと思はぬ故に今は世界か我が物じや。
金をもつたりや貧者はいやしもたぬ昔を忘れたる。
惡を嫌ふを善じやと思ふきらふ心かわくじやもの。
戀し床しも只今むかりあはぬむかしが有るゆゑに。
うれしめでたや老せぬ君に尋ね逢たりや我ひとり。
後世を願とてひいきを願ふいとゝ我慢に添かけて。
あんやう淨土はこゝじやもの五萬〳〵の億もなし。
奇妙ふしぎは一もないぞしらにや世界が皆ふしぎ。
有爲の轉變わがなす事としらで迷ふはおのがそん。
無爲の心はもとより不定知らで迷ふはおのがそん。

とかく浮世はないものじや心と身よりたゝうたへ。

雨月物語（つゞき）

上田秋成

吉備津の釜

妒婦の養ひがたきも。老ての後其の功を知ると。咨これ何人の語ぞや。害ひの甚しからぬも、商工を妨げ物を破りて、垣の隣の口をふせぎがたく、害ひの大なるにおよびては、家を失ひ國をほろぼして、天が下に笑を傳ふ。いにしへより此毒にあたる人幾許といふ事をしらず。死て蟒となり。或は霹靂を震ふて怨を報ふ類は、其肉を醢にするとも飽べからず。さるためしは希なり。夫のおのれをよく修めて敎へなば、此患おのづから避べきものを、只かりそめなる徒ごとに、女の慳しき性を募らしめて、其身の憂をもとむるにぞありける。禽を制するは氣にあり、婦を制するは其夫の雄々しきにありといふは、現にさることぞかし。吉備の國賀夜郡庭妹の郷に、井澤庄太夫といふものあり。祖父は播磨の赤松に仕へしが、去ぬる嘉吉元年の亂に、かの館を去てこゝに來り、庄太夫にいたるまで三代を經て、春耕し。秋收めて、家豐にくらしけり。一子正太郎なるもの、農業を厭ふあまりに、酒に亂れ色に耽りて、父が掟を守らず。父母これを歎きて私にはかるは、あはれ良人の女子の貌よきを娶りてあはせなば、渠が身もおのづから修まりなんとて、あまねく國中をもとむるに、幸に媒氏ありていふ。吉備津の神主香央造酒が女子は、うまれだち秀麗にて、父母にもよく仕へ、かつ歌をよみ、箏に工みなり。從來かの家は吉備の鴨別が裔にて家系も正しければ、君が家に因み給ふは

果吉祥なるべし、此事の就んは老が願ふ所なり、大人の御心いかにおはさんやといふ。庄太夫大に怡びよくも說せ給ふものかな、此事我家にとりて千とせの計なりといへども、香央は此國の貴族にて、我は氏なき田夫なり、門戸敵すべからねど、おそらくも肯がひ給はじ。媒氏の翁笑をつくりて、大人の謙り給ふ事甚し。我かならず万歳を諷ふべしと、往て香央に說ぐ、彼方にもよろこびつゝ妻なるものにもかたらふに。妻もいさみていふ、我女子既に十七歲にありぬれど、朝夕によき人がな娶せんものをと、心もおちゐ侍らず、はやく日をゑらみて聘禮を納給へと、強にすゝむれど、盟約すでになりて井澤にかへりごとす。頓て聘禮を厚くとゝのへて送り納れ、よき日をとりて婚儀をもよほしけり。猶幸を神に祈るとて、巫子祝部を召あつめて御湯をたてまつる。そも〳〵當社に祈誓する人は、數の祓物を供へて御湯を奉り、吉祥凶祥を占ふ。巫子祝詞をはり、湯の沸上るにおよびて、吉祥には釜の鳴音牛の吼るが如し、凶きは釜に音なし、是を吉備津の御釜秡といふ。さるに香央が家の事は、神の祈させ給はぬにや、只秋の虫の叢にすだくばかりの聲もなし。こゝに疑ひをおこして、此祥を妻にかたらふ。妻更に疑はず、御釜の音なかりしは、祝部等が身の清からぬにぞあらめ、既に聘禮を納めしうへ、かの赤繩に繫ぎては、仇ある家、異なる域なりとも易べからずと聞ものを、ことに井澤は弓の本末をもしりたる人の流にて、掟ある家と聞けば、今否むとも承がはじ、ことに佳婿の麗なるをほの聞て。我兒も日をかぞへて待わぶる物を、今のよからぬ言を聞ものならば、不慮なる事をや仕出ん、其とき悔るともか

へらじと言を盡して諫むるは、まことに女の意ばへなるべし。香央も從來ねがふ因みなれば深く疑はず。妻のことばに從て婚儀とゝのひ、兩家の親族氏族、鶴の千とせ、龜の萬代をうたひことぶきけり。香央の女子磯良、かしこに往てより、夙に起、おそく臥て、常に舅姑の傍を去ず。夫が性をはかりて、心を盡して仕へければ、井澤夫婦は、孝節を感たしとて歡びに耐ねば、正太郎も其志に愛て、むつましくかたらひけり。されど、おのがまゝの奸たる性はいかにせん、いつの頃より鞆の津の袖といふ妓女にふかくなじみて、遂に贖ひ出し、ちかき里に別莊をしつらひ、かしこに日をかさねて家にかへらず。磯良これを怨みて、或は舅姑の忿に托て諫め、或は徒なる心をうらみかこてども、大虚にのみ聞なして、後は月をわたりてかへり來らず。父は磯良が切なる行正を見るに忍びず。正太郎を責めて押籠ける。磯良これを悲しがりて、朝夕の奴も殊に實やかに、かつ、袖が方へも私に物を餉りて、信のかぎりをつくしける。一日父が宿にあらぬ間に、正太郎磯良をかたらひていふ。御許の信ある操を見て、今はおのれが身の罪をくゆるばかりなり。かの女をも古郷に送りてのち、父の面を和め奉らん。渠は播磨の印南野の者なるが、親もなき身の淺ましくてあるを、いとかなしく思ひて憐をもかけつるなり。我に捨られなば、はた船泊りの妓女となるべし。おなじ淺ましき奴なりとも、京は人の情もありと聞ば、渠をば京に送りやりて、榮ある人に仕へさせたく思ふなり。我かくてあれば萬に貧しかりぬべし。路の代身にまとふ物も誰かはかりごとしてあたへん。御許此事をよくして渠を惠み給へと、ねんごろにあつらへける

ぞ、礒良いとも喜しく、此事安くれはし給へと私にれのが衣服調度を金に貿、猶香央の母が許へも僞りて金を乞ひ正太郎に與へける。此金を得て密に家を脱れ出、袖なるものを倶して、京の方へにげのぼりける。かくまでたばかられしかば、今はひたすらにうらみ歎きて、遂に重き病に臥にけり。井澤香央の人々彼を惡み此を哀みて、專醫の驗をもとむれども、粥さへ日々にすたりて、よろづにたのみなくぞ見ゑにけり。こゝに播磨の國印南郡荒井の里に、彦六といふ男あり。渠は袖とちかき從弟の因あれば、先これを訪らふて、しばらく足を休めける、彦六正太郎にむかひて、京なりとて人ごとにたのもしくもあらじ、こゝに駐られよ、一飯をわけて、ともに過活のはかりごとあらんと、たのみある詞に心おちゐて、こゝに住べきに定めける。彦六、我住となりなる破屋をかりて住しめ、友得たりとて悦びけり。しかるに、袖、風のこゝちといひしが、何となく惱み出て、鬼化のやうに狂はしげなれば、こゝに來りて幾日もあらず、此禍に係る悲しさに、みづからも食さへわすれて抱き扶くれども、只音をのみ泣て、胸窮り堪がたけに、さむれば常にかはるともなし、窮鬼といふものにや。古郷に捨し人のもしやと獨むね苦し。彦六これを諫めて、いかでさる事のあらん、疫といふものゝ惱ましきはあまた見來りぬ、熱き心少しさめたらんには、夢わすれたるやうなるへしと、やすげにいふぞたのみなる、看〳〵露ばかりの驗しもなく、七日にして空しくなりぬ。天を仰ぎ、地を敲きて哭悲しみ、ともにもと物狂はしきを、さまゞといひ和さめて、かくてはとて、遂に曠野の烟となしはてぬ。骨をひろひ壠を築て塔婆を營み、僧

を迎へて菩提のことねんごろに弔らひける。（未完）

故人の手紙

玉の屋主人嚴夫

左の三通は、女鑑に載せられんため、正しきものゝ中より抄出して送りまゐらすになむ。

藤吉郎か女どもに與ふる書

平信長

れはせのごとくこんどはこのちへはじめてこしけさんに入しうちやくに候ことにみやけいろ／＼うつくしさ中／＼目にもあまり筆にもつくしがたく候しうぎばかりにこのはうよりもなにやらんとおもひ候へどそのはうより見事なる物もたせ候間べちに心ざしなく候まゝまづ／＼このたびはとゞめまゐらせ候かさねてかへりのときそれにしたかふへしなかんつくそれのみめふりかたちまでいつぞやみまゐらせ候折ふしよりは十の物二十ほどもみあげ候藤吉郎れん／＼ふそくのむね申のよしこんごだうだんくせ事に候歟いつかたをあひたづね候ともそれさまほどのは又二たびかのはげねずみあひもとめがたきあひだこれよりいごはみもちをようくはいになしいかにもかみさまなりにおも／＼しくりんきになどにたち入候てはしかるべからずたゞしをんなのやくにて候あひだ申ものゝ申さぬなりにもてなししかるべく候なほぶんていにはしいりはいけんこひねかふものなり

（本のまゝ）　みゝかしく

母北政所より關白秀吉に贈る文

小少將

一筆申上まゐらせ候此春たいこのはるにあひ候へとの御れとづれこよなう御うれしく存まゐらせ候誠にうつし

しゐの花にのみ年〳〵山家の花をながめ春をくらし侍りつるにわさからぬ御さたともいとめでたく存〳〵局々をもめしつれ候へとのよしつもりぬる鬱々をたいごの山の春風にちらして捨む事をさ〳〵しき御恩風にてこそ候へくはしくは幸茂主申上候はむまゝ筆をとめ〳〵めてたくかしく

れねの方へ返事
（れの字分かられど本のまゝ）　關白秀吉

せつくのかたびらいろ〳〵とりそろへ給り候めでたくゆく久しくゆはひ候てめし候まゝ御心やすく（本のまゝ）〳〵九月のせつくはからにてうけとり可申と存候はやくかうらいしろ〳〵れはくとり申あひだからいのみやこべはこのたびがらとてふねつきよりは廿日ちごさ候よし申はやくこうらいのみやこをさいて人數つかはせ候間やがてみやこをもとり可申候御心やすく候ひしふねをそろへ申てやがてわとの人數をもこさせ可申からをのとりて申間そもじのむかひをめでたく可進候ゝしく

かへす〴〵いろ〳〵そろへ給候れうれしく候又そでなしとうふくむようにて候ろでなしくろくのときむかりもいり不申大さかのひのようじん申つけ候まゝかならず〴〵かうらいのみやことり候はゞやがて〳〵大かうさまも御座候はんとれはしめし候

東塢鶴聲（つゞき）

朧昔生

こりずま　コリズマは、其かみコリズと云俗言也。萬葉十五、ぬば玉のよるみし君を明るあしたあはずまにして今ぞ悔しき。又宣命等にミコトノラマとあるも、御言のりにマの言を添たる格に同じ。

さもこそあらめ　サモコソアラメは、然有べきことと
を打任せてゆるす詞也。　さもこそは都戀しき旅
ならめ。　さもこそは墨江ならめ。　など、いひ
なしは變れども同詞なり。旅なれど都の戀しきは
もとよりさこそあらめ。墨江といへど、素より黒
き名はさもあらんと云にて、下を打返す也。古今
の　うつゝにはさもこそあらめ夢にさへ人めをも
るとみるがわびしさ。結句みるがわびしきといふ
べきを、さては　とぢめ　假に迫りて、調を失ふ
より、一等緩めて、サといふのみ。俗にみるがつ
らいなど云。いは即サ也。されど、音便にいとな
だらめたれど、つまらずして、調と〻のひ行也。
されど、歌に見るがわびしいとは、又諷ひ難けれ
ど、サと受るのみ。
させて、サイと云は、つまる方はなけれど、訛れる
也。訛りては卑しけれど、サといはでは叶はぬ也。
猶いはんには、つまるは歌に非ず。訛るは歌なれ
ども、感少し。されど、訛らずして感あるをと〻の
へる歌とす。今の歌人は、あまりを厭ひて、つま
るを知らず。鄙人はつまること少なくして、訛る
也。兩つの中、つまらんよりは訛るならんか。訛
るは猶歌。つまるは歌ならされど也。平言は訛る
事かわりて、つまる事なけれど、先平言をよめと
いふ也。

時雨　シグレは萬葉十三に、一日にはちへにしく
〳〵　などよみ。後にも、しく〳〵降などよみな
し、間なく降來るものなれど、シクタレの意にて、
シグレといふ。瀑布をタルミといふ類にて、降く
だるをタルといふ。五月雨はサアメタレ。霰はア
ラタレ。霙はミゾタレなるべし。田舍わたりには、

霙をミゾタレ雪と云。水垂雪なり。今は雪を省きてミゾレと云馴たるなるべし。ナミダは泣垂。ヨダレはヨヽ垂。など思ふべし。

やさしき　ヤサシキは、耻かしきといひて意はたがはず。されど、語勢たがへり。語勢かはれど、意も聊たがふ所出くるなり。一むきに取べからず。ハヅカシは、耻の、はからざる詞にて、打向ひて彼に凌がるゝ意ぞへ也。ハヂク。ハヅムなどの詞によりて思ふべし。ヤサシキは、ヤサバミなど、優の字を當たる、よく叶へり。因て、此二つを分ていへど、ヤサシキは弱き詞にて、心の中に耻るに當る。ハヅカシキは、表にあらはに耻る也。やがて、辱かしめの意也。

旅寐にして　萬葉十、旅にして妻戀すらし郭公神なび山にさ夜更てなく。是、山郭公の山にあらん、更に旅と云べきものならねど、もと浮たる准へごとなれど、さる理りまでは立入らで、ふと越ける情のまゝを述出たるぞ歌の歌たるいひなるべき。

如巧如飾　古今に、音に泣てひちにしかども春雨にぬれにし袖ととはゞ答へん。聲たてゝ泣浸せし袖なれども、もし人問はゞ、此頃の春雨にぬれにしなり。と、答へんといへり。音に泣てひちにしは、強く、春雨にぬれにしは手輕也。云まぎらはす調より合り。同事も。夕立に。村雨に、などいへど劣る也。音に泣てと聲たてたるを、只それとなき春雨に輕く負せたるがあはれに面白きなり。難じていはゞ、春雨は時にあへるにて、自然なれど、泣は聲あり、春雨は音なし。と、いふ意ぞへまで思ひめぐらさんや。作者の知らぬ境迄もてつけて説んそのかはといふべし。抑、すべて歌といふもの

を解かきりは、何れの作者も、知らぬ境にて、さるきは迄は己れ思入侍らずと云べし。此歌のみに限らんや。是をしらずしらず、巧むが如く飾るが如しと云。孝を説て孝子しらず。忠を説て。忠臣しらざるは誠實の至にして、巧言の士の知る所にあらず。此雨、春雨ならずは、音に泣てとは云出さゝる也。夕立は夕立、村雨は村雨の真景に従ひて、又さる方にいひなさるゝは、已も知らざる自然の事也。其れのづからなれる姿を、後より解なすは、註也。作者の思慮に出ねど、其作者しらずといへども、作者の誠の外ならねど、是即作者のなせる趣也。他より入たるに非ず。作者しらずと雖も、作者を證るに非ずと知るべし。目は視、鼻が嗅。手は探。足は行しと、日夜止まらずと雖ども、其形、其心、共にしりざはるに似たり。人より是をしたゝめて問、心に答る所なきが如し。

秋風　秋は風の上、きは初て悲く哀なれど、大方秋には風をいふ事也。されど、風に用なきに、風をいふ歌多し。古今、秋風に初雁か音ぞきこゆなる云々。秋風にかきなす琴の聲にさへ云々。萬葉に、秋風に山飛こゆる雁がねは云々。秋風に今かくと紐ときてうらまちをるに月傾きぬ。高圓の尾花吹こす秋風に紐ときあけな只ならずとも。など、皆風には、さばかり用なし。時の感哀大方風にあれど、かく云添たるものなり。又秋風の吹にし日より云々、秋風の淸き夕に天川舟こぎわたる月人をとこ、秋風の吹なん時にひらかんと云々、秋の風ふかむを待はいと遠きかも。など、思ふべし。されど、萬葉に、秋風をよめる歌五十七八首に及べど、春風をよめる歌は兩首ばかりなり。春は風

に用なき故也。

理りの差ひたる歌　ことわりの聞えねは、萬葉に、此夕降くる雨は彦星の早こぐ舟のかいのちるかも。古今、夕月夜さすや岡への松の葉の云々。わかぬとて今はの心つくからになどいひしらぬ思ひそふらん。飛たつと人はいへども鶯のなかぬ限は非しとぞ思ふ。小黒崎みづの小島の人ならば都のつとにいざといはましを。又、古事記に、秋山に日がくれぞ、夜はいでなん。是聞えざるに非ず、調とゝのひたれど、誰もきゝしるべし。されど、道理は違ふ也。是歌はことわるものにあらず、調ぶるものなりといふを思ふべし。鶯蛙の聲も歌也といへるは此謂也。又土佐日記に、雨風ふかず云々。又日一日夜といひて明にけり。と、結べり。漢文にも、易に、潤之以風雨。此類猶多かるべし。

昔生云。本文の歌は、理るものに非ず、調ぶるもの也。は、いさゝか語弊あらんか。蓋、其意を猶いはゞ。歌の感は理りに非ずして、調べにありといふやうにいはま欲きこゝちす。

おきの玉藻（續）

永石德文

藤樹先生年譜（續）

十有五年、戊寅、先生三十一歲。

今年始て、谷川寅、落合左兄弟來て業を門に受。又大野了佐といふ者あり。彼父先生と親しく友たり。了佐嫡子たりといへども、稟質極て愚魯鈍昧にして、士業繼に足ざるを以て、父嘗て賤業を營しめん事を計る。了佐是を憂て、先生に來て曰、我醫とならんと欲す。願くは醫書の句讀を敎よ先

生其志を憫て、大成論をよましむ。先二三句を敎ふる事二百遍ばかり、己より申に及て、漸記す。食に退て後、これを讀む。みな忘る。又來て、是を習ふ事百遍余にして、始めて記得す。これより以后日に來て習ふ事、年をふ。先生江陽に歸に依而、今年來て醫を學ぶ。先生その醫術を曉得しがたきを以て、醫筌を作て、これに授け、又これを講じて、其意に通ぜしむ。后醫を以て世を渡り、數口を養ふに足れり。先生嘗て曰、我了佐に於て殆んど精根を盡す。座に在るもの皆よく敎る事を嘆ず。先生の曰、我かれに敎といへども、彼つとめずんばあたはじ。かれ甚愚昧なりといへども、其勵勉の力は絶甚奇なり。況や了佐か如くならざるものは、其勉むる所を知るべし。

春中川貞良攝州より來て學を問ふ。秋、吉田氏來て敎を受く。先生嘗送行の詩あり。

夏、持敬圖說、幷に原人を著す。これより前、專ら四書を讀て、堅く格法を守る。其意專ら聖人の典要格式等、逐一に受持せんと欲す。然れども、間時に合ずして、滯碍行かたきを以て、疑て以爲らく、聖人の道、如斯ならば、今の世に在て吾輩の及所にあらずと、是に於て、五經を取て熟讀するに、觸發感得あり。故に持敬圖說、幷に原人を作爲して、同志に示す、是を行ふ事數年、然れども、行はれざる所多くして、甚人情に戻り、物理に逆ふ故に、疑止ことあたはず。

十有六年、己卯、先生三十二歲。

春、藤樹規、並に學舍座右銘を作て、諸生に示す。

三月、山田權、豫州より來て、醫を學ぶ。夏四月、中川熊、豫州より來て、業をうく。夏、小學を講

す。明年の冬に至て終る。諸生專格套を守る。

夏、諸生とゝもに、竹生島に遊ふ。輿に乘じて、詩を賦す。

秋、論語を講す。鄉黨の篇に至て、大に感得觸發あり。是に於て、論語の解を作んと欲す。先鄉黨の篇より起て、先進の二三章に至る。病苦にさへられて、果さず。后此解を以て、心に合はざる所多しとす。

十有七年、庚辰、先生三十三歳。

夏、孝經を讀て、愈味深長なる事を覺ゆ。これより、毎朝拜誦す。

今歳、性理會通を讀に、發明に感じて、毎月一日齋戒し、太乙神を祭る、蓋古天子は、天を祭るを事とす。是を以て、此を祭りて怠らず。後妻の喪によりて止む。喪終りても亦病氣に妨あるを以て、又祭らず。

夏、太乙神經を撰ばんとして、稿半に及ぶ。病を以て終に成書に及ばず。

秋、豫陽の同志の求に依て、翁問答を著す。已にして後、其書心にかなはざるところ多し。故にこれを改んと欲して同志といへども、博くこれを示さず。然れども癸未の春梓人此を盗み取て、板行す。先生此を聞て、梓人をしてこれを破らしむ。此より後改め正んと欲す。曰上卷は孝經に觸發して、其意をうつし書す。故に其論穏當なり。下卷は世を憤り、弊を矯む。是を以て、其說抑揚大過なることを免れず。故に先下卷を改んと欲すと、是に於て、數條を改む。病を以て終にならず。

冬、王龍溪語錄を得たり。初是を讀とき、其觸發

する事の多きことを悦ぶ。然れどもその佛語を間雜し、禪學にちかき事を恐る。後陽明全集を得て、これを讀に至て、龍溪の禪學に近からざることを知る。且佛語を間雜するの世を憫むの深きことを見る。如何となれど、聖人一貫の學、本大虛を以て、準則とす。老佛の學皆一貫の中を離れず。唯精粗大小あるのみ。達人何ぞ其言語を忌んや。且當時佛を學の徒多し。是を以て、其語を間雜して、其外にせざることを示し、皆大虛一貫の道を悟らしめん事を欲するものなり。（未完）

大學和歌

金津常十郎

隨の著者宮井安泰は、わか高祖父にして、三江茶話の著者祖父宮井民同の父なり。さるを、前號祖父としるせしは、幾代をふるとも、代々の祖をかくかきし例あれど、祖父と記せしにこそ。

ひこたちとひめたちのけじめはあれど、ものことわり道のつぎてれなじけれど、こも隨といへるふみの内より、室直清といへる人のものせし大學和歌といふをぬき出づるになん。

明明德

みなひとのもとの心はますかゞみ
　みがゝはいかて曇りはつべき

新民

ふりにけるならの都のならはしも
　あらたまりゆく君がまことに

止至善

よしと見るその一ふしを難波なる
　芦かるかたにうつさずもがな

格物

わが宿のちくさの花をとめてこそ
　色なきはるのいろもしらるれ

色なきはるとは無理なきをいふなるべし

白雲のいく重とみねてこねくれは
　たゝひとすぢの山路なりけり

是は一理貫通の心なるべし

致知

日をへつゝふみ見るにこそ玉鉾の
　みちのれくをもしらかはの闇

致知は書をよむを先とすればかくよむべし

誠意

色みねてこゝろの水はこもりねの
　草のはつかにつゆもにごれり

意の誠ならぬといふは志の善をなさんとは見ゐながらそれさきだからぬといふさあればかくよむなるべし

鳥羽たまのよをてらさずはから錦
　ひるもうらなき色と見ましや

下の句は不善の掩はれぬことをいふなり

ひとしらぬ心に恥ぢよ恥ぢてこそ
　遂にはぢなき身ともなるらめ

此二首は慎独の心なるべし慎独は誠意の注にあれはひとつにかよはして詠ける也

正心

みわのやま杉たつ門を尋ねきて
　すぐなる神のめぐみとぞしる

露すがる萩のうは葉によろへ見よ
　かゝれてたはむ人のこゝろを

心の正しからぬといふは七情のこゝろにかゝりておもみさなるゆゑなりさあれはかくよむなるべし

修身

朝夕にたもつわか身はからごろも
　たちゐにうつせつねの姿を

れもへたゞ身のあやまりを三笠山

さして心のとかならすとも

正心の役身のおさまらぬといふは身のふるゝところにありて
少しも心よりいつるにもあらんさあれはかくよむなるべし

齊家

いつとなくともにくむ井の底清み
むすびもかはせもとの心を

わきかせをよろにてそきけ家の内
ひと言の葉のうらのなけれど

治國

しるやいかに民のかまとにたつ煙
いくゆふ暮のなかめなるとは

なに事のみるにかひある國なれや
こゝぞうき世にすみよしの濱

平天下

九重のよるのたまきぬそでさむみ
れはふたかりに世を思ふらん

春風のふくとはなしにおのづから
のどかに見ゆるよつの海づら

今歳の春、おもはず火災にあひて、年比儲蓄し、書籍集字も、殘らず灰燼と成りぬ。詩を賦し、文を顯すにも、故事往訣などひき考に便なければ、徒然のすさびに、大學の三綱八條を題にして、三十一字につらね侍る。古より、釋教の歌は、代々の集にも載れかるれども、儒教のうたは、みえ侍らず。近き比、世に取傳ふるもあれども、心いひれはすとみゆるは、歌のさまかたくなり。歌のさまをかしとみゆるは、其心たらず。元來、和歌は、我國の風俗といへり。日比まなびぬみちなれど、かくよみて六義のかたはしにもかなひ侍るべきやおぼつかなし。されど其道しれる人につたへんと書つけけるなり。

鳥のおとそれをしるへに尋ね見よ
　ふりにし道のよしあるゝとも
すゑの世に我を忍びん人しあらは
　この言の葉をあはれともみよ
（をはり）

茂しは草

風當咲子

其四　食事の折

正午となりぬ。家へゆくものもあり。はたひるげのまうけとりいつるもあり。おのれもかへらんとはおもひしかど、またきにあかぬ心地しけれど、さばれとて、厨のほとりをさまよふに、七つばかりなるをのこの、海軍にやあらん、小さき身にふさはしき洋服きて、膝までのズボンに、赤き靴下、あいらしといふもおろかにて、おのが子にも見まほしげなるが、しきりに門の方をながめてたゝずめり。打よりていかにしてかと尋ぬれども、あやしげに見あげて、何ともいらへず。此ちごのかほ、何となう見ればゐあり、よく／＼おもひめくらせど、すぎし日運動場にて、いと活潑に遊びつゝ、他の友だちを馬となし、おのれ打のりてえたりがほによろこべるを、らうたしと心とめしわらはなりけり。さすがに聲をいたしては、泣きもやらねど、いとあやうげに見えたり。やがて教師きたり、いさ來たまへ、何してかゝる處にはと、其手を取れば先生、けさ乳母が辨當はおとよりといひしに、まだきにもてこぬなり、家にかへりていろしきやといふ。少しまちね、やがてくべしといふほどもなく、年五十路にも近きやうなる女きて、教師にむかひ、いんぎんに禮をなす。此わらは

見むきて、嬉しげに、其腰にまとひ、何してかくはおそきぞといふ。乳母いとおしきことゝしてけり、まらうどのきたまひて、おもはずおそくなりてと打わびつゝ、辨當渡して歸りゆく。内には先生〳〵とよぶ聲す。敎師内に入れば、宮本さんが泣きてゐたまふと口々にいふ。敎師何かかたへにゆきて物いふさまなりしが、やがて其子の手を取りて、いできたりいさ泣かでをあれよ、いま兄君にいうてわけてとらすべし、と、いふと見れば、左手には、辨當の上ばかりもてり。大方飯ばかりありて、さかなのあらぬなめり。ほどもなく、さきの涙は名殘なく笑ひとなりて、かへり〳〵しきりに師にむかひてものいふめり。近づくまゝにきこゆるは、先生けふかへらば、僕はかつを打ちてやらんといふなり。敎師そはあやまちて忘れしなり、女中なりとて、みだりに打つはわろきことぞといましむ。此子またおもひいでたる如く、敎師のかほを見あげて、先生もし此おかづがたらざれば、御飯を半分のこしゆかんといふ。敎室に入りながら、何か答へたりしさまに見えしかば、それはきゝとられざりき。げにおどけなきさまいと〳〵をかし。さて一同正しく、おのがどち座につきて禮をなし、箸とりわけぬ。をかしきちごども打つどひ、物くふさま、いかにらうたくをかしからんとおもはれしかば、さすがに内に入らんもはづかしくて、また應接所へ至りぬ。かくて次の授業時間には、他の敎室をもおとづれしかば、わづらはしければ略きつ。小さきちごどものらうたく、めでたきさま忘れがたく、心にとまりければ、たゞかたはしをもとて。

（をはり）

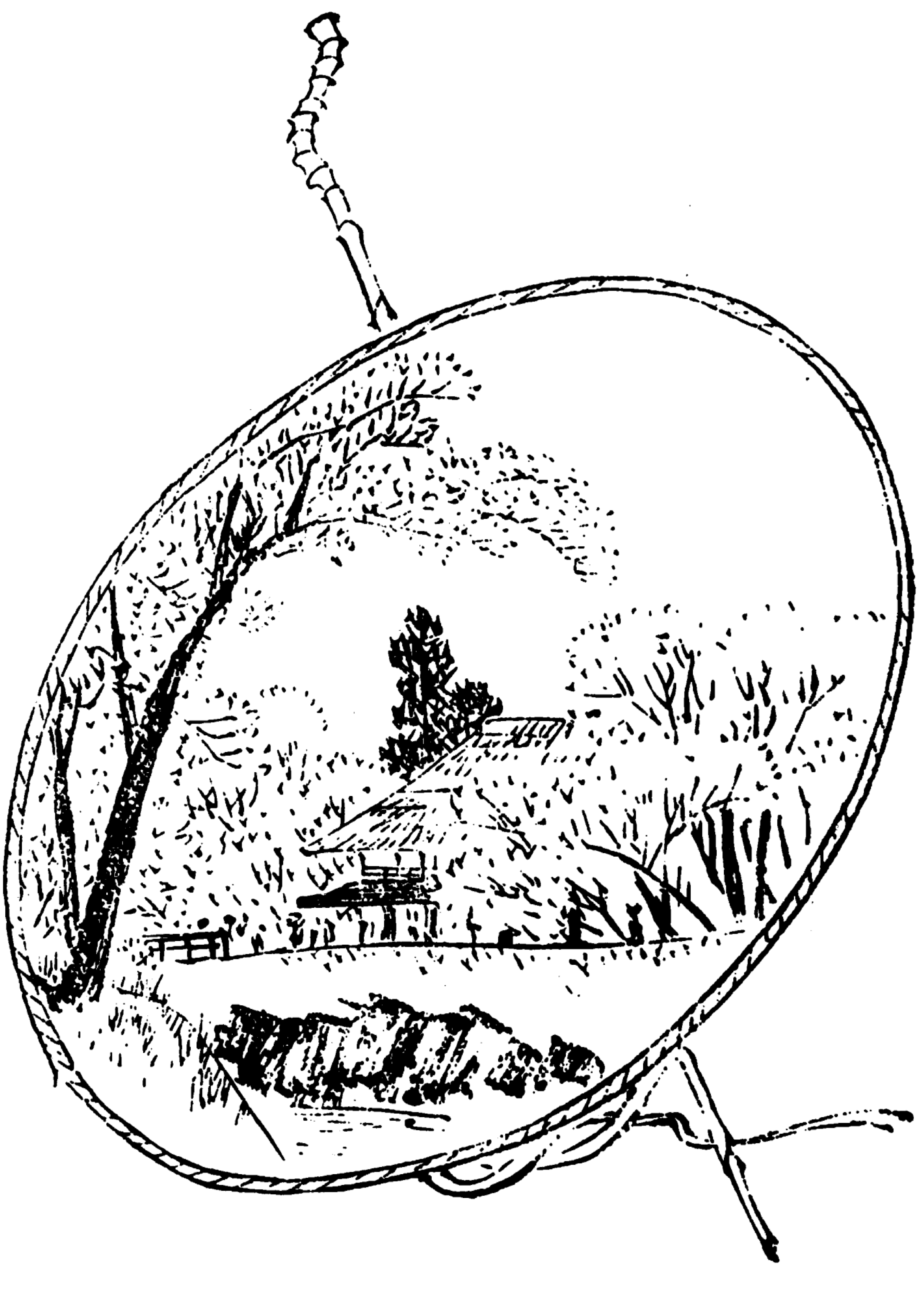
四月はじめの七日[illegible]

東京二十四景（廿）

蓬生屋女史

小金井

柳は緑の髪新しく、のどかなる風に梳り、櫻は紅の顔うるはしく、うららかなる霞がくれにほほゑみ空も、野山も草木も、打ち見るより何となう心ありげなる春の此のころ、吹きかへす小袖のうらわたゝかなる春風にまかせてうかれもてゆかた、上野の岡隅田の堤、さては飛鳥山、江戸川、春の錦の都べは、何處か樂しきながめならざらむ。都の大路よりは、やゝ遠く幾里をか離れてはあれど、小金井の花までうかれゆかむも、けに、のどかなる春のこよなき樂しみなめり。



玉川上水の流れをはさみて、左右の堤に咲きと咲きつゞきたる櫻のけしきにて、隅田堤江戸川原のに比べては舟を浮ぶるの興はあらねど、清き流れを中にして、さしむかひて咲き競ひたる花のながめは、隅田にはゐ見ぬけしきなれど、木立ちふるびて大やかなると、藁の軒柴のまがきあたりの家居のひなゝるが、なかなかに石垣、錬化造りのいかめしきに比べてはひやびやかに、花も一際ゆかしさをますてゝちす、家づとにはいろいろあなれど、賤屋をたのみて筍たけを堀らせて歸へらむは、よにめづらしき家づとならむ。

朝露　（其十一）

雞の林に風立ちて、行きゝの雲のけふ何れとも定まらぬこの頃のさわがしさよ、二三人あつまれど、いつも軍の話のみ。石をなげ木をとる童も、いさましく軍歌をうたひて、白紙に赤インキにて日の丸畫きし旗れし立てゝ、大路小路をぬりありく、いといさまし。こゝには義勇團、かしこには櫻組など、ゐのがまにまに打ちあつまり、御國の御用にたゝんとするけなげさ、これも皆日本臣民のゐがたき德とやまうすべき。成歡、牙山、豐島、平壤の勝報つゞき至りて、世の中もれのづから勇みたてり。されども、我海軍をあやぶむは、一般の輿論なりけり。松井海軍大尉は、開戰の勅下るやいなや、常備艦隊、旗艦、松島にのりくみを命せられ、最愛の新婦をのこして、いさましく出軍の途にのぼりぬ。明治二十七年九月なかば、俄然、世人を驚かし、且つよろこばせしは、黄海の勝報にぞありける。各新聞社より、我れぐれにと出す號外のよびごゑは、我が東京市中に

ひゞきわたりて、海軍大勝利々々々々………

・・・・・・・・・・・・

さても愛子は、不運のものや。御國の海軍の大勝を得しは嬉しけれども、天とも、地とも頼みし夫よ、此の黄海の戰に、敵彈をうけて、朝日に匂ふ櫻花、赤き心を君に捧げて散りにしとか。軍のならひとて、出陣には驚かねど、日々に備ゆるかげぜんに、我がつまぶしにましませと、我が身を參らせて祈りまつりしを、うらめしのうき世や。ともしび闇き閨の中に、むすびかねたる夢の中、とろ／＼とまどろむかと思へど、みもしらぬわらいろに、只一人とりのこされて捨小舟、よるかたなきにねをなけど、戀する人もあら海の、底に沈むとみては覺め、さめてはゆめをくりかへし、もしやと思ひみだれては、三度の食も喉には入らで、身の瘦せ見ゆる此の日頃、思ひ頬ふ我がせこは、まこと御國の御爲に、あはれ御國の御爲にと、日々むせびかへりでは、しめりがちなる日を送る、實にたのみなきうき世よな。庭のそともに鳴く鳥の音も、世のはかなさを告ぐるが如し。

水產王（續）

石 樗 靑 苔

八助の酒宴の場に日頃めさるゝ謡ひ女たまさは、よしある家の生れなれど、落ちはふれて、磯野の舊主人にはいたく恩義をうけたるものなりけれど、いかに貯蓄の金子さはなりとて、また主人の土饅頭のかわかぬほどに、わらぬこと〻瓜はじきしてありけれど、身は人によるゝがつとめにて、いなむ理にもゆかねど、せむかたなく其たびごとに出行きぬ。八助はた正をまたなきものに思ひ、頬にいひよりけ

れど、たやすくはうべなふべくも見えず、彼はいよ〳〵いひ募りて、酔のまぎれ言に「わがいふ言だにきかで何事も思ひのまゝなり、よき家もつかはすべし、下女もわきてむ、金子も要らむほどは與へむ、磯野の財産はわが財産なり、この大福長者をよそに見ることやある、もしさる者あらば大しれものなり」などいふに、さときれ正はそれとさとりて、恩義ある磯野家のこと、よし、さきの男のわれに心あるころ幸ひ、底の底のふかき工みを見あらはし、舊の恩をうけし人にむくひ奉る時はこの時とはやる心をおししづめて、はからるゝとはさすがの八助殿もかりもおもはざりき。

難波の町がはじめか、磯野の家がはじめかといふぞかりなる舊家、いかでやみ〳〵虫の如きものゝふみにじるまゝになるべきぞと、ふるひたちしわれ正が一心のとゞきてや、八助の奪はむとたくみたる磯野の財産も事なくて終りは終りつれど、まだ世なれぬ蒲津男はいたく歎き、人心のたのみ難きをしり、誰により誰を頼までよかるべき、これといふもかへらぬ歎きにくづをれてありしほどの事、さても十年にあまるまでまめに仕へしかの男の、などさるけしからぬ心はおこしけむ、わが徳のなきなめりと面伏しき心地して、いそぎ伯父の許に文して、事のわけくはしくいひやりければ、驚き大方ならず、いそぎ下り來て何くれと心をつくし、蒲津男の決心をきゝて、いよ〳〵喜をのべていさ子とめあはせ、望みの如く父のあとをうけつぎて、その職業につかしめぬ。こゝに傾かむとしたりし磯野の礎はいよ〳〵かたくなりて、新婦は家の事とりまかなひ、内助の憂をのぞき、かつわれ正はわが家の守護神なれとて、伯父

の思ひによりて、そこそくの前借金を抱主にいだし、改めて磯野家に召していさ子をたすけしめけれど、いたく感じ入りて、年下なるいさ子をど姉の如くに尊びむつび、又いさ子もわが姉妹の如く睦びけれど、辱けなさ身にあまり、身も心もあらむ限をつくして仕へげるにより、新次は心安く魚類製造場のことを監督して、漸くすゝみぬ。

かくて鴛鴦の夢暖かにして、磯野の榮えまさるともれとることあらじとれもへるほどに、今年は滿洲男は丁年にみちて、兵にめさるゝ年とはなりぬ。國のためとれもへる身にも、今こゝに三年の年をよそに過ぎなむ、やうやうに道づきし家の政を如何にせむ、さりとてのがるべきにあらずと、其日をまちてありけり。原善介はこたびわが監視區長となりてけるに、定めのところにめし出されて、軍隊とともに身体などあらためられけるが、よく此家のこと忘れるによりて、わけをやいひとかれけむ、今のところにては、三年のつとめは家の傾くもとゝもならむ、せめて七月ばかりなれぞとて、輜重輸卒にめし出されぬ。

家の事は何事もみな妻のとりまかなひて、留守の間には事なくてあれかしと、祈りゐたり。われもともに心を用ゐて、身は主人につき勤務を盡せるのみか、又ふかきめぐみによりて、かく安らかにくらるゝことの嬉しさいふばかりなしと、折々は託しばることもありけり。

春とはいへどなほ寒き二月の夜のつれづれに、主なき今宵は又一しほの淋々しさ、「今頃はいかにしてれはすらん、さぞなくるしくもさむくもおはすらんと思へど、内にて火鉢かゝへてかゞまりゐるも勿体なけ

れど、あきらめられぬぞかゝりに寒きことよ、埋火かいれこしてむ、暖まりて寢床に入らせたまへ」など二人かたろふ眞夜中に、月光さすが如くさしわたりて、庭の面鏡の如くなるに、心は闇のねぢけ者、竹みつかわざものか、すらりと引拔きすかし見て、冷やかに打ゑみつゝ、雨戸さらりと引あけて、頰冠まぶかにしたる男の入來るに、二人ははたと驚き、さやと打叫べど「聲を出すと突殺すぞ」といふに、おそろしさいはむかたなく、顏だにえあげず、こなたは威丈高になりて、鼻のあたりに刀さしつけ「やをれ命をしくば金のありかをしへよ、をしへずばからよ」と刀背面にさしつくるに、お正はふととびたちて、刀もつ手をしかととらへてはたらかせず「泥坊々々」と大聲に叫びければ、刀をすてゝあわてふためき、表の方へ逃げ出すを、店の間なりし男のむらがりて折かさなり、難なくこれを引捕へ、高手小手に縛しめて見れど、こはそもいかに、八助ならむとは、「よく御主人の家にねらひよりしよな、」と口々にのゝしりつゝ、大手をひろげてしたゝかにそこゝともいはず打すゑ、警察にぞひきゆきける。

馬とともに臥し、馬とともに起き、馬厩屋のはききよめより、馬の喰ふ物までつくり與へ、馬を牽きて荷をつくとては、つけ方わるしとて、何もしらぬ一本筋の兵卒に叱られ、馬とともに仆れて肉さけ骨も折れしかと思ふ斗なるに、かてゝ加へて蹴あげてうたれ慨もて蹴られ、一人だに勞はりてくるゝ者なく、よしいたはりてくるゝ儕をもちたる者ありとても、そも同じくわが伴なれどみな仝じ情にあはれむなりされどいかにあはれと思ふともこれを救ふよしなければ、徒らに袂なき袖をしぼるのみ。況して凡兵卒

と見ればみな上官、日曜日の散歩もおもしろしと思ひしはまだ中學にありし頃のこと、今は敬禮の手習にいづるが如し、將佐尉曹卒各三等にわかれたるがみな上官にして、師團一萬人皆敬禮せねばかなはぬ身、あゝわれ生れて馬とならざりしを疑ふばかりか、中々に馬と生れざりしをくやみしばかりに、憤ろしかりしこともくやしかりしこともいはず、たゞ七月の間に立派なる馬方となり終へて、よのうきふしのおもしろさをはじめてさとりぬ。凡人としてさばかりの心をもて働かば、何のならぬことかあらむ。いでこれよりはわが世ぞとふるひすゝみし滿律男は、いよ〳〵水產の道に心をひろめて、支那との交易をすゝめ、東海の濱磯野あるを知りて他の漁場あるを忘るゝに至りぬ、しかも其主僅かに二十才にみちし斗、美しき面はさながら貴公子の如し、あはれ末たのもしく後世畏るべしと、その筋の人々はみな舌をまかぬものなきに至りぬ。

朴平（十八）

白魚女史

猫ならばとて、そち如き猫ならばよし、狐にてもよし、狸にてもよし、むじなにても、そち如きならば、何ならばとて、憎くかるべきことかは。たとへ狐のはらにもあれ、狸の穴にもあれ、汝れだにあれば、我れには天上ぞ、神の宮居ぞ。何に、朴平、朴平が何ぞ。文雄の家の僕のみ、いやしき僕といふのみ。その朴平を、何に、小千代、恐るゝべきものかは。もはやうるさし、な泣きぞ。小千代、己れは、いかに云ふとも、今日は歸らぬ。歸る心にならぬ。されば歸らぬ。われが此處にありては、小千代、うるさ

くた、なれは此處に居るな。居らずともよし。何處へなりと引き籠りて休息せよ。もはや云ふな、きかぬ、知らぬ、うるさしとばかり云ひすてゝ、自ら酌む杯の手もはげしく、焦ちたるけしき。小千代は、なほしとやかに膝すりよせ、さては、此の小千代が、彼の翁にすみませぬ。今宵ばかりは、如何に仰せ玉ふとも此處には留めまつる事は叶はじ。留めまゐらせては、妾がすみませぬ。やよ殿、春の夜の月、月も、おもしろうのぼりぬ。このおぼろの月かげに、川原づたひ歸り玉はんはげにしくものもなく御心ゆかせたまふ限りならむ。枉げて今宵ばかりは歸らせ玉へ、小千代が御願ひ、一生の小千代の御願ひ、叶ひ玉へてとなきつ、くどきつ、歸り玉はねど、この酒もまゐらせじと、銚子さへとりかくせば、文雄は、何に酒やらぬ。そちたちに貰ふべきと腹立ちて、例のおとさへ見ず、手にせる猪口をも側の壁をめがけてたゝきつけ、前なる膳ふみくだきたるまゝ、怒りの足もとあら〳〵しく、襖をも跳破らぬばかりに立ち出づるに、小千代は、さすが心もとなく思ひまどひながらも、なほ追ひ出でゝ、車夫をよび、よく〳〵心してまゐらせてよ。旦那様、其處の車にめし玉ひてなど、彼方に心づけ、此方にすゝめなどするを、文雄は耳にもかけず、近よれば踏み仆さんといふやうなるけしきにて、尻目にかけたるまゝ、すた〳〵と行きかくるに、小千代はなほいだきとめ、御怒りはさる事ながら、さの玉はで、車ばかりには、せめてめさせ玉へ。おみ足も嘸かしつかれてましまさんに、遠くはあり、夜分には侍れは、妾が心づかひを、少しはくみとり玉ひてと袖にとりつき、すがりつきて、是非に召し玉ひてとすゝむれど、たのま

ぬ事、いらぬ世話。用なき事すなとて、すがる袂を、情なくふりきりて、遂にきかず。

○○　○○　○○　○○　○○

さるにても、文雄、何處へか行きたる。その夜も、遂に歸らず、翌日もいつしか暮れ行くになほ歸りこねど、朴平は、百代の手前、いろ〳〵に云ひつくろひ、涙も見せねど、心にはいとゞかなしく、くるしく、なさけなく、もゆる思ひ、消ゆる思ひ、心は千、々に亂るゝを、强ひてれししづめて、百代に向ひ、今日は必ず歸らせ玉はんと思ひてなるに、いまだ歸らせ玉はず。春とて、あまりのうかれやう。杉田ぞかりにては、あこがる心のとゞめかね玉ひて、なほ遠くうかれ行き玉ひしやもはかられず、春野樣の御家には、何かれ便ありしやも知れねど、くや〳〵と家に待ち奉らんより、今より一走り春野樣までまゐりて、樣子の程たづねてこそまゐるべけれ。まさかの事も候へど、すぐにも歸り候へと、さも侍らずど、たよりよるべき方の侍れど、しばしひま入ることも候はむ。れそけれどとて、必ず心づかひ遊ぞさでと、返す〳〵言葉のこして出で行くは、そも春野にはあらで、向島の梅屋方、今日こそは如何にもして文雄をつれ歸らんとてなり。

ひま入ることもあらんとは云ひ遺してなれど、なるべく早うかへりて、百代の心を安めんものをと思へど、朴平、つね〴〵主人がのりつけの車夫をたのまんとしつれど、否〳〵人は口さがなきもの、もしあやしき處にゆきつる事の、人の耳に入りなどあしかりなんとて、よき程行き離れたる所より、客まちの車夫のすゝむるをよきしほにうちのり、小車のめぐり急がせて、引かれ行けど、心も、とさま、かくさ

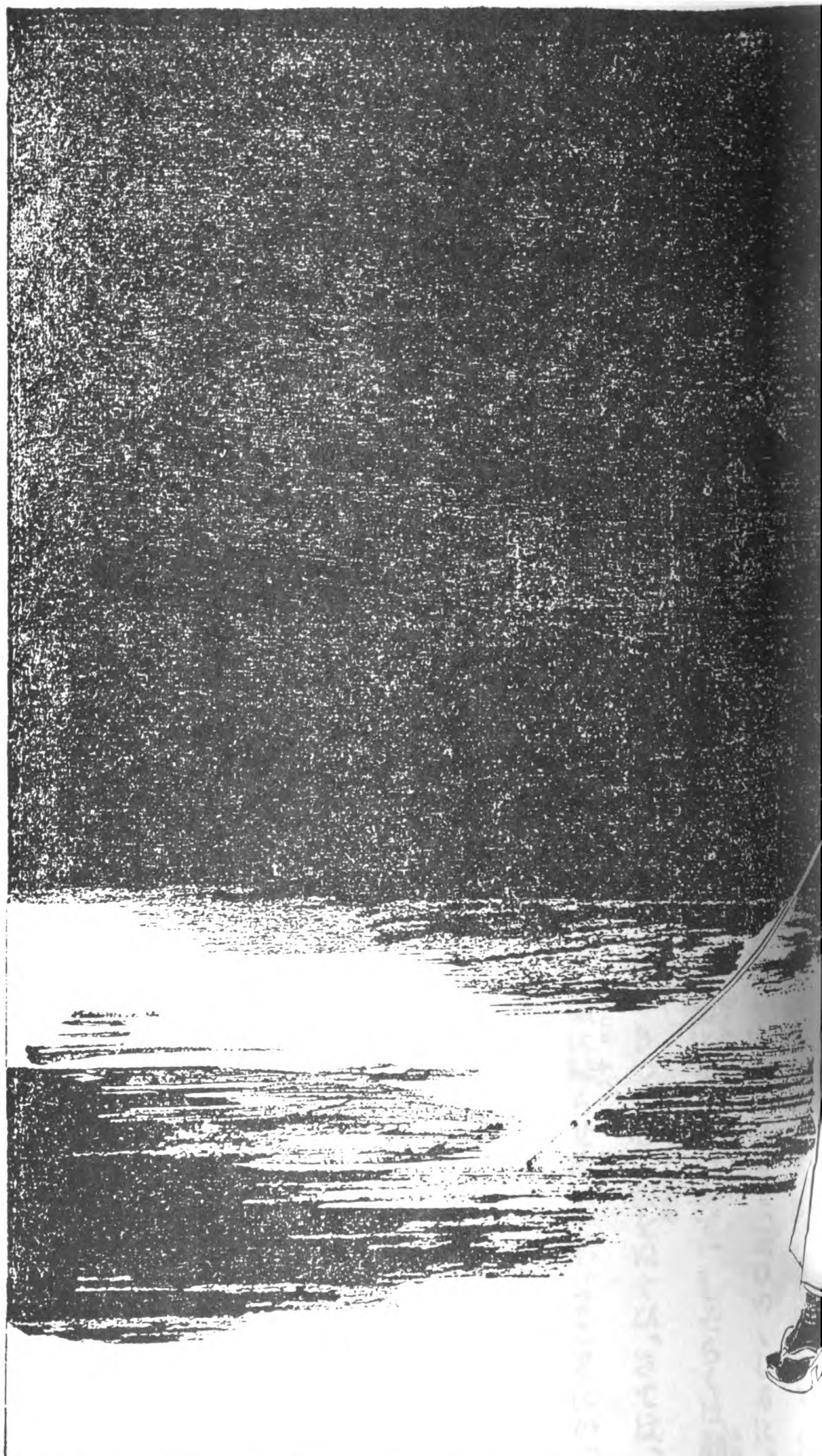
ま、思ひめぐるなり。

やがて、れぱねたる梅屋の軒提燈。こゝぞ〳〵と大聲に車をとゞめて、立ちよれど、家の女子どもは、はやくきゝつけて、さつとかけ出でけるが、あな、昨日のちよんまげぢゞいかと、見るより笑ふも憎くし。

主人は此處にのみと一圖に思ひつめたる朴平は、何の會釋もなく、そのまゝづか〳〵と座敷へ通れど、いやなぢゞい、きび惡き白髪爺よ。何しには來たれる、案内もなくづか〳〵と人の家へと、のゝしりさやぐ小猫どもの聲に、親猫ならむ老妓の出で來り、ほんにいやな爺づら何しに、人の家へ、づか〳〵とと云ひかくるに、朴平主人の見ねぬに、さては何處へかかくしたるものよと思へど、何としにとは何にしに。忘れてか、我は昨日も來りし伊能知家の老僕朴平なり。是非今日は主人を伴れて歸らねばならぬ事ありて、かくは來れるなり。我が主人を何處へ隱せしぞ。かくせしとて、かくされぬものを、早う若殿など此處へ出せよとて、きつとにらみつくるに、をかしき爺かな。伊能知樣は昨夜遲く歸られたるものを。さては、此の翁は氣の狂ひたるにてか。げに、さ思へど、目の色のたゞならぬはなぜとて、人々傍へもよらず、返答もはか〳〵しくせず、がや〳〵とわめき居るに、何を、己れこそ瘋癲め、不具者め、何處へ隱しまゐらせしぞ。疾く〳〵此處へ伴れ參らずやと、いよ〳〵猛り立ちて、かみもつかんばかりに。怒りのゝしる老僕の聲。

今日は頭もれもしとて、ひきこもり居りし小千代は、わやしうればつかなく思はるゝに、目もまふばかりなる頭のわづらはしさを、強ひて堪へて、立ち出で





ゝ、頻りにのゝしりさやぐ人々をとりしづめて、店の方へ追ひやり、ひとり朴平が膝ちかくかしこまりて、言葉靜かに、さても心もとなや。殿はいまだに歸り給はずとか。いとおぼつかなや。をぢの歸りたまひてより、やうやくに説きまゐらせて、お歸し參ゐらせつるが、歸り給はぬとは心元なや。まことにてか、まさしく歸り給ひしものをと、心元なげにとひかくれば。己れ小猫め。おとなしげなる面にくさよ。うまくも云ひつくろふ奴かな。さる面つくり、さる聲音つくりてこそ、わが大切の主人をばたばかり落とせしか。憎くき小猫め。さりとて、此の朴平、此の朴平は、よも、そちたちにたばからるゝ朴平にあらず。隱くさずにとく出し參ゐらせよ。面の皮のあつき小狐ども、早うわが主人を出し奉れ。見るもきたなき猫どもめが、狐づれめが。汝等如き動物中間へいつまで我が殿をば置き奉らんやとて、うちもかゝらんばかりに怒り立ちて、云ひのゝしるに、小千代は、わつと疊になきしづみて、しばらくは顏もゑ上げざりしが、きつと心に涙をぬぐひ、さては、殿には、昨夜も、誠に歸らせ給はでか。まことにか、朴平どの、殿には歸りたまはでか。もしや朴平どの、御身は昨夕より思ひつめて御心のとり亂れてにはあらずや。まさしく殿は御身が後より歸りたまひしなればと、涙ながらに朴平をうち守るに、此の小狐、なか〳〵の古狐よな。何處までたばからんとはする。昨夜此の穴にいねられしにはあらずや。朴平何の氣など狂はん。いざ何處へ忍ばせ參ゐらせたる。案内せよ。若殿、何處にはまします。朴平が參ゐりて候。さても口惜しき若殿にはなり給へるよ。御兩親の御遺言をも忘れさせたまひてかと、齒をくひしめ、齒

をくひしめ、はら〳〵と兩眼に溢るゝ涙は流つせ。小千代もわきかへる袖の涙に身をしぼるばかり、さては誠に歸らせ給はざりしにか。さばかり怒りたまひてれはしたれど、もしは、もしや。もしもの事の、心元なや。のられずばたゞなりと車夫をばつけさせ參らせなばよかりきものを。もしもの事あらば如何にせんと、よく〳〵の思ひわづらひ、げに顏の色さへうち變りてぞ見ゑける。



野春風　近衛忠熈

梅かをりうぐひすなきて春の野は
　かぜのとかにもなりにける哉

海邊春月　久我建通

波よするいそ山ざくらちるも見む
　かすみなはてぞ春の夜のつき

山路雉　前田利嗣

はつ蕨もとめかねたるやまかげの
　道にきゞすのこゑをきくかな

早春海　高崎正風

ふじのねの雪のかげこそ消にけれ
　霞やたてる田子のうらなみ

海邊霞　松浦詮

ひさしかた江戸のいり海うちかすみ

安房の遠やまみえずなりぬる

河上春月　　毛利元敏

かはかみの梅見てかへる舟ならし
　棹のおとすなりおぼろ月夜に

影媛　　宮地厳夫

大君のおはみこゝろのかゝるとも
　まらでやまひに身をゆるし劒

遠村柳　　小出粲

うちわたす野川の末のやなぎはら
　霞やさとのかきねなるらん

春朝　　鎌田正夫

鶯のこゑをまくらにきゝながら
　なほこそさめね春のねぶりは

夜梅　　大口鯛二

さしこめてねんと思へは窓のとに
梅か香かをりつきはうつりは

山上雲　　諏訪忠元

松風のしらべと絶えてあしびきの
　やまにもをにもかゝるしら雲

大和日記の中に　　大畑弘國

まかねちをはしる車のけぶりのみ
　むかしにかはる大和くにはら

やまと路は群山あれどかみよまで
　おもひつゝくる大神山あはれ

早蕨　　三輪義方

はなといふ花さく春にはならで
　そらまはしきはのへの早蕨

早蕨　　草野隆道

うめのはなちりしく野邊の早蕨は
　雪間に萌えしてゝちこそすれ

歸雁　菊池興澄

をちこちの高嶺を路のしをりにて
かへりもゆくか天つかりが年

折花贈人　安齋篤敬

君がため手折りしうめのはななれど
散りにし後も香をなわすれぞ

ある人の別をゝしみて　仝

今はとてにほひむかりをうめの花
とゞむる袖にはるさめぞふる

折梅贈人　伊東祐賢

とはれなむ折らざらましを梅の花
誰にか見せんきみならなくに

竹裡鶯　木庭芳香

咲くはなはうつりやすしと鶯は
あせぬみどりの竹に鳴くらん

旅春雨　黒崎仙太郎

たびごろもたちにし日より春雨の
はれぬながめにぬるゝ袖かな

山家梅　鍋島榮子

うらやましぬしはしらねど咲匂ふ
梅につゝめるやまかげのいほ

野春風　蜂須賀随子

すみれつむ袖につゝみて歸らまし
梅がかふかき野べのはるかぜ

柳經年　柳原愛子

いく春かふる川のべのくちやなぎ
片枝みどりにもえいでにけり

春雪散風　小池道子

梅のはなかつちる春のあさかぜに
まじれる雪もめづらしきかな

江上霞　北島以登子

貝ひろふさとの子どものこゑすなり
ぬまのふる江の霞がくれに

蕨につくつくし　松平健子

長閑なるこゝろを野べにつくつくし
さわらびをさへ折ゐつるかな

いかた　日野西廣子

吹かせもなみにさはらぬ春の日は
さすいかた士ものとけかる闌

のとかなる日濱へに出つ　保科節子

ひろはゝや梅の花貝さくらがひ
霞わたれるはまつたひして

森鶯　鶴久子

うふすなの杜のともし火影うすく
殘るあさけにうぐひすのなく

春雨晴　中島歌子

芦がきのえたりやなきに風たゐて
やがて晴ゆくはるのあめかな

池龜　諏訪晴子

いけ水のそこもにごさですむ龜は
こゝろゆたかに萬代へむ

霞中梅　安東菊子

八重霞たちへたてたるさはひめの
袖よりもれて薫るうめか香

夜春雨　海上壽子

花鳥のえなさだめしつれもふとち
はるの雨夜のこゝろなぐさに

紀元節　柴田靜榮子

かしはらの宮居畏こくあらはれし
ひかりはよゝに曇らざりけり

行路柳　師岡須賀子

もえそめし柳のいとのほそまゆを
よりみてゆかぬ人なかりけり

梅花夜薫　清水靜子

梅の花にほひしなくもやみの夜に
いかでか人もわれもしらなん

探梅

井上賴文

いつのころにかありけん。あるやんごとなき殿の、御まへに人々めしつどへ給ひて、われは、いちはやく、人のまだ知らぬ方の梅見てまし。いましたちは、まづ梅ある方たづねて、とくかへりごと申せとの仰せことありき。こをうけたまはれるその子ども、すなはち、みたちより、心ざす山べをさしていでたちぬ。とみの事なれど、おのが家にもたちよらず、父母にも妻子にも告るいとまもなし。まして瓢わりごなどの設けをすべくもあらねど、飢ゑたる時は、わずかに、握り飯をたうべて、むなしき腹をみたしつ。さかしき山々、けはしき谷々をこえわたりて、辛くして、きよげなる山に梅の匂へるを見出でたり。ちかづくまゝに峯にも尾にも咲きそめたる梅の匂ひ、こと處よりすぐれたり。ふと見れど、かたへに大なるあばらやあり。家のつくりざま、庭のたゝずまひなど、よしありげに見ゆ。やれたる垣のひまより、何心なくうち見やれど、姿いやしからぬ女のいたくやつれたるが、頭おもげにもたげて、彼の尾の上なる梅ながめつゝ、ものおもはしげなるさまなり。いとゆかしくあはれに覺えけれど、あれたる庭の霜ふみつゝ、あないを乞へど、きよげなる女のわらはのおもやせたるがいで來て、いづかたよりぞと問ふ。わ

れはさるやんごとなきとの丶仰せかゝふりて、世の人のまだ心づかぬ梅の初花をも尋ねんとて來つるなり。この前なる山々の梅は、よになくめでたし。此の家まむしかし給はらずや。うけひき給はゞ、とのにもこの由告げまゐらせていでましのまうけせん。いかにぞやといふ。かのめのわらはは、鶯のやうなる聲して、そはいとよろこばしき事にこそ、さはべらんには、このあれやを、みながら奉らん。なほ御望もましまさむ、此の山をもともにまゐらせん。病になやめる母だに養はせ給はむと、涕をのみつ丶いらふるさまいとあはれなり。まからむ、此の由、とみに聞ゆわけて、いふがまにまにはからひてん。母の病は、心安くおもふべし。よきくすしにも見せ、たふとき藥をも得させてん、と、いへば、女のわらはは、よろこぶこと限りなし。病みたる母も、この事を聞きとりて、ともによろこぶけはひなり。かゝるをりしも、いづこよりか來たりけん。かしらの髮はから獅の如く、まなこざしは、さながら荒鷲の如くするどき老婆、霹靂のやうなる聲ふりたて、かねてわがものと占め置きたる此の梅、ことわりなく來て見るだに罪ふかきを、まして、此の山をも家をも買ひとらんとは、シャ何者ぞ。とく歸れ。とく行け。かにかくあらがはゞ一口にくらひ殺しつべしと、蛟の如き舌ひらめかし、鰐の如き口はり開きぬ。にくき妖婆がふるまひかな。おのれまがものたゞひとうちぞ、やまとがたなのきれあぢ見せんと、とねりをよべど、こは如何に太刀もたせたる舍人は、いづちにかにげ失せけん影だに見ゑず。口惜と齒がみをすれどかひなし。老婆おそろしげなる眼みはりて、此の山かはんとしたる人もにくけれど、賣らんとしたる者こそ

猶にくけれ。いでこらしてんと、つと走りよりて、つかみかゝりぬ。あなやと驚く女のわらはは、やみたる母もともどもに、やよや、やまとの御さむらひ助け給へと泣きさけぶ。あはれ、今、我が三尺の劍あらでと、身をあせれどかひなし。母子のものよ、しだしまて、まづこの所をのがれて後、必あだをむく義ひ得させん、といふいふ、ひたはしりに走りきて、遠く見かへれど嵐にむせぶ滿山の梅花、憂ひを含みてすくひをまつもの丶如し。その時、あはれわが太刀。あはれかの梅。となん、そのさむらひはなげきけるとや。



雜報

●皇后陛下のみめぐみ　陛下の御いつくしみの御心深くまし〳〵て、民草をあはれませ給ふは、今更にはあれはしまさねども、今度も臺灣にわたりて、土匪討伐のために負傷して手足を失ひたるものには、さきに日清戰爭のをりに負傷せしものとひとしく、手義足を下し賜はんの御心にて、このほど仰せ出させ給へりとなん。かたじけなさいはんもかしこしや。

●英照皇太后の御形見　皇太后陛下のおはしまし丶御ほどは、農事をこのませ給ひて養蠶機織の御事をすら、御手づからせさせ給へり。かくて泉涌寺靈

明殿なる、先帝御祭日用の香爐御打敷と東福寺靈牌殿なる、御父君九條關白故尙忠公の靈前に据ゑし、香爐の御打敷とは、御手一つに、養蠶より、織りあげ給ふまで、せさせ給ひし御物なりといふ。さて又青山御所に御田あり。こは、去し明治の五年に、陛下の東京にうつり來ましゝ折　主上その御心を慰め奉らん大御心より仙洞御田なる、修學院、松ヶ崎加茂三ヶ村の農家の婦女五十人を召し給ひて、青山御所の内に御田をつくらしめ給へるなり。五月女は、年若きを撰み給へるに、黑木綿の衣服に、白木綿の襷をかけ、黑き前垂をかけて、參りたれ共、賤の女のやごとなき邊りを恐れ畏みて、いと謹愼なるさまなりけれど、國母には、つねゝゝの如く仕れとの御こゝろにて、終に田植歌をも唄ふ事となり、且五月女等には、赤き襷一筋づつを賜はりしが、これより年々御田植の例あり。今年もまた、其時節の近づきぬれど程なく、赤き襷の五月女を見るならんに、御覽せさせたまふべき御方は、雲井の外にならせ給へぞとて、青山のはたりの人々坐ろに袂を濕せりとぞ。

●御還啓　皇太子殿下には、去年の十二月のころより、御避寒御保養にとて、沼津なる御殿におはしましゝが、このほど空もはるめきわたりたるに、御病もいゑさせ給ひにたれど、去し二十二日御けしきいとうるはしく還啓あらせられたり。この日供奉には、黑川東宮大夫、池田侍醫、本居、三島兩東宮侍講、醍醐東宮職御用掛等にして、小松大將宮、閑院宮兩殿下を始め、松方首相、西郷海軍、土方宮内、大隈外務、野村遞信、蜂須賀文部、清浦司法の各大臣、東久世樞密院副議長、細川同顧問官、田中宮内次官、其他陸海軍將校、裁判官、及、各華族、

宮内省高等官等、數百名は新橋停車場に奉迎せられたり。

●英照皇太后御製

古ことを思ひつゞけて大かたの
なげきにまさるなげきをぞする

こは先帝の十年祭をせさせ給ひしをりに、ものせさせ給ひし御歌なりとなん、れはましまし〻むかしを、おぼしかへさせ給ふ御心のほどさこそと推し奉るもいとかしこしや。つねに御謙徳ふかくまし〱しかど、かくこの道にも秀でさせ給ひながら、折にふれての、御口すさびも、多くはあらはし給はず、ひめれかせ給へど、雲の上人すらもうけたまはりしるものすくなしとなん、こは寂羅坊、土岐善靜といへるが、高崎御歌所長を訪ひて、きゝ得たるなりときく。

●春季皇靈祭　は去し二十日、例によりて、宮中にて行はせ給へり。御喪中のことなれど、聖上、皇后兩陛下には、御代拜として、侍從、女官等をつかはさせ給ひ、親王諸大臣には、參殿せずもあるべきよし仰せ出させ給ひしと承りし。

●小楠公の位階贈進　本月六日小楠公に左の如く贈位されたり。

贈從三位　楠正行

特旨を以て位階被追贈　贈從二位

●小楠公祭典の軍歌　河内の國なる四條畷神社は、小楠公を齋き奉れる社なり。ことし五百五十年に當れるをもて、その祭典をもよはし奉らんとするよしにて去し一日より十日まで十日の間擧行すときく。さてこゝの祭典事務所にては、こたび大坂府尋常師範學校の敎諭なる、橋本光秋氏にたのみて、その軍歌を撰みつくりて、こを全國の小學校に頒ちて、

祭典の折、この軍歌をうたひ、遙拜せしめんとすといふ、さてその軍歌は。

小楠公五百五十年祭の軍歌

建武の御世の中興は　日を經ぬ程に亂れ來て
吉野の宮は花ならで　雲霧四方に立て籠むる
正平戊子の春のそら　全勝にぞ見ゑたりし」
忠孝無二の小楠公　天性雄勇の德に富み
父母再度の教訓に　堅め鍛へし赤心の
健雄心の一すぢは　岩をも劈く計なり」
警田河原や瓜生野に　あつぱれ敵を惱まし丶
其天運を繼ぎ果てゝ　四條畷の夕風に
草葉の露さ散りはてし　跡をし問へば哀なり」
屍は野原に朽たせども　其名は世々に芳しく
四千四萬の同胞は　公の心を鑑にて
盡しに盡す誠ありて　國威は四方に輝けり」
いらかは空に聳るまで　柱は岩にさゝくまで
飯盛山の麓べに　宮居を建てゝ嚴かに
寄ひ祀らふ國人は　公に酬ゆる外ぞなき」
流久しき湊川　その神社さ對して
實にこそ國の護なれ　實にこそ人の鑑なれ
寶祚は天壤無窮なり　御國は千世に隆べし」

●めぐみ　女鑑第百二十八號の雜報欄に、童女の螢雪とかきて、記したる二童女にとて、群馬縣、桐生町に住める森山ゑい子より、この手紙にそへて金壹圓を惠まれけれど、本社は直に之を大坂西區長に托して、童女のもとに送りつ、富めるもの丶百圓は、貧しきもの丶千圓にも對ひつべし。生ひそめし緑の若草、ぬるき春雨にいきかへる心地やせましかし。ゑい子が心のそひくまれていとなつかし。願くは、この二童女よ、すく／＼と大きくなり、家をもおこし、御國のみためともなりて、報恩をなわすれぞ。

(上略)次に郵便小爲替を以て、金壹圓御送り申上候間、まことに少々ぞかりにて、御はづかしう存じ候へども、筆墨の料までに御つかい手御座候はゞ、大坂西區幸町通り二丁目幸小橋北詰、東へ入る田中じう方に住居せらるゝ二人の童女へ、御送り被下度合せて御願申上候かしく

三月廿三日　群馬縣桐生町　森山ゑい

●女子高等師範學校卒業證書授與式　女子高等師範學校にては、去月三十日卒業證書授與の式を擧行したり。其の次第を記さんに、午前九時三十分、生徒、職員、及び來賓を式場に導き、一同着席するや、唱歌の聲起りて、　皇后陛下特賜の御歌(みがゝずば)及、(思へばはてなき)を唱ふ(此の間總員起立)次て、卒業證書を授與し、終て秋月校長の告辭、文部大臣の祝辭、卒業生總代の謝辭、(女子高等師範學校、附屬高等女學校)蜂須賀侯爵の祝辭、同夫人の教育意見朗讀(代讀あり、再び唱歌(はてしなき)ありて式を了り一同退場す。來賓凡三百餘名に及びたり。左に卒業生の姓名を示さん。尚、當日文部大臣の祝辭及同侯爵夫人隨子の教育意見書は次の如し。

女子高等師範學科卒業生　(氏名いろは順)

大阪府平民　岩崎かの
愛知縣平民　笹のぶ
高知縣士族　松山金樹
福井縣士族　橋本やす
愛媛縣平民　土谷ふで
岡山縣平民　藤岡あくり
千葉縣平民　新橋きく
宮崎縣平民　根井あい
富山縣士族　小池より
熊本縣士族　戸次ひさ
靜岡縣平民　南雲廣野
山口縣士族　天野きよ
神奈川縣士族　土肥八十
秋田縣士族　鏡みよ
東京府平民　朝日利鎌
靜岡縣士族　岡本かれ
和歌山縣士族　山本山恐
京都府平民　宮武みよ
靜岡縣士族　高北だい
京都府士族　安谷けい

女子高等師範學科撰科卒業生

長野縣士族　介田やす

附屬高等女學校補習科卒業生　(氏名いろは順)

埼玉縣平民　小能登久
東京府平民　三浦元
大分縣平民　小栗栖千重
東京府士族　林なほ
東京府士族　小林信

附屬高等女學校本科卒業生　（氏名いろは順）

高知縣士族　磯林龜尾	鹿兒島縣士族　吉留なみ
福井縣平民　八尾幸	東京府平民　飯山翠
東京府士族　丹治絢	岐阜縣士族　松本澤
東京府士族　犬飼瑞枝	奈良縣士族　立野つる枝
長野縣平民　小池きく	長野縣平民　池上さみよ
千葉縣平民　曾根榮子	靜岡縣士族　赤松曾代子
熊本縣士族　今村たけ	東京府平民　坪野卿
北海道廳平民　齋藤ゑつ	東京府士族　橋本ふみ
千葉縣平民　中島彝	東京府士族　北川郁
東京府士族　林蓉	東京府士族　永持豐
東京府士族　水野郁	佐賀縣士族　長谷川誠
東京府士族　村井綾	東京府士族　清水志計
東京府士族　細川淑	埼玉縣士族　大役秀
東京府士族　日根野駒	山梨縣平民　折居留代
東京府士族　織田辰子	新潟縣平民　守木貞
鹿兒島縣士族　川路進	東京府平民　大平ぎん
東京府士族　千本元	埼玉縣平民　吉田順
大分縣平民　保田綾	山口縣士族　諏訪房
埼玉縣平民　吉田貞	山口縣士族　山內みれ

蜂須賀文部大臣祝辭

本日茲ニ女子高等師範學校卒業證書授與式ニ臨ミ諸子カ多年淬勵ノ功ヲ積ミテ此榮譽アル良結果ヲ得タルヲ祝スルハ本大臣ノ最モ欣喜スル所ナリ

諸子ハ自今以後各々實地ニ就キ年來得有セル所ノ學行兩ナカラ施スヘキノ秋ニ遇ヘリ因テ本大臣ハ諸子ニ對シ將ニ一言ヲ贈ラントス

顧フニ女子カ學問ノ精粗ト性行ノ淑媺トハ其家庭ノ敎育郷閭風俗ヨリ延テ一國ノ汙隆ニ幾多ノ關繫ヲ有セサルハ莫シ是レ本大臣カ常ニ女子敎育ニ重キヲ置ク所以ナリ然リ而シテ輓近女子敎育ノ全般ヲ通觀スルニ國力ノ駸々トシテ增進スルニ相ヒ伴ハスシテ獨リ遲緩ニ傾クカ如キ觀ナキニアラス是レ本大臣ノ深ク憂慮シ將來之カ改善ノ必要ヲ感スル所ナリ而シテ今諸子ニ向ヒテ其希望ヲ屬スル所以ノモノ亦此ノ要點ニ外ナラス

諸子カ他日人ノ師ト爲リ又人ノ妻ト爲リ母ト爲ルノ時ニ當リテハ

學校ニ家庭ニ若クハ郷閭ニ於テ慈愛ナル母儀ヲ鑑サヽルヘカラス貞淑ナル婦徳ヲ修メサルヘカラス端麗ナル師表ヲ全クセサルヘカラス孝子順孫ハ諸子カ育成スル所タルヘシ良風美俗ハ諸子カ扶植スル所タルヘシ是ニ於テカ果シテ能ク世ノ諸女ヲシテ模範遵式セシムルニ足ルヘキナリ是レ諸子カ前途ニ横ル所ノ最大任務ナラスヤ諸子宜シク此旨ニ悖ラス各自ニ益々奮勵シテ以テ女子教育ノ一國ノ文明ヲ補益スル所以ノ實ヲ擧ケラレンコトヲ望ム

蜂須賀侯爵夫人隨子意見書

女子教育の事に就きてはおのれいさゝか思ふふしなきにあらざりしかと才淺く德卑きを省みて何事もいふことなかりきさるをこたひ我侯文部の長となられたれは學の庭にもうとからぬ身とはなりぬされはかれておもふことはむにさすかに便りなきにしもあらされは其事の一二をいはむとす然れとも辭拙けれは口つからいはむには心におもふことの千かひとつをもいひときがたらむことを恐れまた筆もて述へむとするも才淺き身は筆のすゝみはかとらすしておもふかきりを盡すへきにあらされといはてやまむは斯道にまめなるものといふへからす故に今紙をとりつゝ諸子の深切なるわか心の誠をおもひはかりて斯道の資とせらるゝあらはこよなきよろこひにこそ

つら／＼おもふに當今はいつれの女學校も其規模おほかたとゝのひて學科の整備學術の進歩昔にくらふへくもあらす實によろこはしき限といふへしされと利のある所は害もまた伴ふことわさにもれす皆人の思ひいたらぬ所に於て其弊すくなからさるか如し故に其よしをのへて諸子の注意をうなかさむとするなり

一凡そ男子は其生るゝ時よりして體格性質を異にし又そのつとめもことなるは誰も／＼よく／＼知る處なり故に女子を教育するにつきてもこの辨へなかるへからす古より東洋の國々にて女子を教ふるには靜婉溫順の德を具ふるを以て目的とせしといへとも其中にまた深くとして動すへからさる德あるを尊へりされは女子の德は貞を以て第一としたりき貞とは正くして他に移ることなく松竹の綠なるか如きをいふなり猶ほこれを委しくいふときは百折不撓の勇氣を持ちなから其行は如何にも物靜にしておとなしく柔和なるをよしとするなり故に女子たるものは慈愛溫厚の天性は勿論百折不撓の精神をも養ひ同時に容貌の閑雅靜淑柔順ならむことをも期すへし若し其等の注意なくしてひたすら智識のすゝまむことをのみ期するときは學業の發達すると同時に種々の弊害相伴ふことなしといふへからす

一女子の學を修むる其道々に於ては素より男子に讓るへきにあらすといへとも若しこれを誤りて上に述へたる男女の分別をわすれ諸事一向男子に競はむとする念慮なるときは或は溫順を以て臆病となし輕跳を以て活潑となし謙遜を卑屈となし高慢を見識と爲すに至らん加之自己の知識に誇り自已の學藝を衒ひ人をいやしみ人を誹り甚しきにいたりては貴ふへき父母舅姑をも輕蔑し敬ふへき良人に驕り貞淑の德を忘るゝか如きこと必しもなしとせす

一總て書よみ學に志すものゝ道德を口にせさるはなしといへともこれを其身に行ふものは極て稀なりそのこれを行はさるのみならす前にいへる如くうらうへの行を爲すもの　あらは教育はかへ

りて婦德を敗るものとならむ豈にかゝる道理あらむやおのれか常に心をいたむるものこゝにあるなり

一我邦むかしは特に女子を教育すへき學校なかりしかとも後世の摸範とすへき貞婦烈女あり賢母良妻ありて燦然として歴史を飾れりこれ皆天性の美質によりて其本分を省みてつとめ行ひしによらさるはなし況や方今開明の盛時にあへり博く歐米各國の長所を撰ひ知識を擴充して男女の本分を明にし固有の美德に加へて内助の完きを期するあらはこゝに始て女子教育の完美を得たるものといふへし

一生徒にして教師を敬ふは言を俟たさることなれとも女生徒にして男教師に對するは特に嚴正ならさるへからす即ち言語擧動を鄭重にし妄に狎るゝやうの事あるへからす但し教を受くるときに質問なさするなりには充分解得するまで問ひ極むるをよしとす

一凡そ學問の要は男女を問はす各々其本分を盡すにあり故に諸種の學科を學ひ數多の書を讀むは人たる道を行ふへき方法たるに過きす但し哲學の眞理を發見し物質學上諸種の發明を爲す如きは固より學者の本分にして實に尊ふへきことなれとも是等は寧ろ天賦の才學ともいふへきものにして世の道の人には望むへきにあらす故に普通の人にありては名々其本分を盡すを以て目的とすへきなり妄に學藝に誇る如きは決して當を得たるものといふへからす然るに若しかゝる行爲を爲すものありて世の擯斥を受くるときは一般女子教育の妨害となること少からされは能く〳〵愼みてます〳〵教育の普及をはかるへきなり

右の條々は誰もよく知りたる事にはあるけれとおのれか常に心におもふことゝもなはいさゝかこゝにかいしるしつ猶ほこまかなることは拙き筆の盡すへきにあらざれは諸子よろしく其餘を察して誠心のほとを明にせられむことを企望に堪へさるなり

●女子大學創立會　は、去し二十五日、帝國ホテルにて、創立會を開けり。來賓は、近衛公爵、蜂須賀侯爵、大隈伯爵、を始め、貴衆兩院議員、新聞記者等。百余名にて、司會者土倉庄三郎氏、開會の趣旨を述べ。次に近衛公爵登壇して、余は、實地に當れる學習院生徒につきて、家庭教育の忽にすべからざることを知れり、而して、その家庭教育を司るものは女子なるに、女子教育は甚だ不完全なるを以て、如何にかして好成績を得たしと思ふ、故に此の擧に賛成す。と、述べられ。次に成瀨仁藏氏は、女子大學校設立の主旨として、女子教育の最も必要なることを希臘古代の例に徵し、尚、米國の例を引

さて、我が國女子教育の振はざることを述べたり。次に大隈伯登壇して、余は教育家に非ざれども、成瀬君の熱心なる至誠に對して一言すべしとて說きおこし、我が國の同胞は四千萬人にして内二千萬人は女子なるが、女子は常に男子に服從的に制御せらるれど、社會に立つものは、恰も二千萬人と全し有樣なりと、いぶかしき說を述べ、次て、又、男女を金銀貨の單複本位に比喩して論ずる處ありたり。其の次は、蜂須賀侯爵登壇して、女子大學校の設計は賛成なるも、他にもこれまで種々なる名義にて、立派に打つて出るものあれど、其の終を能くせざるもの多きを以て、充分愼重に計るべきことを述べ。次に江原素六、島田三郎兩氏の演說ありて閉會したり。

●東京府高等女學校卒業式　東京府高等女學校にては、本月四日卒業式を擧行せり、來賓は、久我府知事、牧野文部次官、市會議員の諸氏、其他凡百余名なり。先つ唱歌を以て式をはじめ、學事報告ありて、卒業生六十九名に卒業證書を授與し、了て校長の告辭、知事の祝辭、卒業生總代の答辭等ありて、十二時閉式散會したり。

●大坂尋常師範學校卒業式　大坂尋常師範學校にては、去月三十日、卒業證書授與式を擧げたり。來賓は、控訴院長、知事、警部長、各郡長、其他學校名擧職、新聞社員等、百數十名にして、一同着席するや、生徒の唱歌あり。校長勅語を奉讀し、了て卒業證書を授與し、校長、知事の告辭、生徒總代の答辭あり。唱歌（君が代）を奏して式を了りたり。女子部卒業生の姓名は左の如し。

野村はつ　助野こま　畑口みつ
館野しげ　香川良千代　鈴木總枝
淵守 樫　荻野佐江　向山りく

天岡つき　井澤小米　澤田なほ
千賀辰　吉圓かく　廣瀬ゑ
上田りき　館野銑　岸上はな

●東京女學館卒業式　東京女學館の第六回卒業授與式は、去し二十七日、午後二時より、虎の門内なる同館にて、舉行せり。式場は、館の講演室にて、其上下には種々の生花、及び各生徒の繪畫を裝置して、來賓の觀覽に供せり。二時十分奏樂と共に式を始め、證書授與の上、辻館長は卒業生を送る演説あり。次に宮内大臣より寄せられたる、祝詞の代讀あり。卒業生總代答辭を述べ、次に英詩諳誦、國文、英文、等の朗讀あり、午後六時閉場せり。卒業者は。

早川いく子　下山ゑん子　簑村よし子　野澤なのゑ
藤崎さだ子　山口やへ子　須田かさ子　尾崎なみ子
糸川はつ子　森つた子　毛利千代子

●福島高等女學校　福島縣にては、是迄高等女學校の設けあらざりし處、今度いよ〱設立の認可を得て、目下生徒の募集中なりといふ。女子教育の日に増し盛らんとする、喜ぶべきことなりかし。

●女學生には似もつかず　かゝることは聞かずもがな、はたいはずもがなのことながら、いはでもねあるまじければいふなり。去月の十七日といふに、廣島高等女學校にて、學術試験をせしに、成績よからずして、家政科、裁縫科などには、及第點を得るものいと少く、倫理科などには、零點に近きものさへありたるに、引かへて、體操科はいづれも〱成蹟こよなくして、みな滿點を得たりといふ。いかゞはしきありさまかな。女學生の身として家政、裁縫、倫理、などは須要の學科なるに、成蹟あしくして、體操科にのみよしとは、あなうたてのことや。體操もとよりゆるがせにすまじきことながら、他の須要

の學科をつとめずして、動作のみ活潑なりとて、何にかはせん。大聲をはりあげ、荒々しく手足をうちふりたりとて何のせんかあらん。さらんよりは鋤鍬を握り、車のあとをおして父兄の家計をたすけんには如かざるべし。

●京都の花信　　このごろの暖かさに、梅の後なる花はとり〴〵にて、笑のみ脣傾げぬ。祇園の垂絲櫻は、來月の二日頃、松が崎、玉水、吉岸の彼岸櫻もその頃や盛りならん。知恩院、淸水、若　寺は六日頃、嵐山、花之寺は九日頃、平野、御室の八重櫻は十六七日頃いづれも例年に考へて見頃ならんと、げに華洛の春げしきこそ懷しけれ。

●孝女賞を受く　　多年舅姑夫に事へて、孝貞一日の如く、嘗て怠ることなく能く家事を治むるの廉を以て、去月五日、左の如く賞を受けたり。詢に女の鑑とすべし。

新潟縣越後國南魚沼郡三角村
佐藤梅太郎母
駒形とく

稟性温順貧寠ノ中ニ在リテ多年舅姑ノ病ヲ看護シ誠慤慰藉左右違フコトナク貞實夫ニ事ヘ夜ハ子ニ訓ヘ夫ノ兄嫂ヲ待ツニ友愛ノ道ヲ以テシ夙夜紡織樵耕等ノ業ヲ勤メ節儉以テ衣食ヲ足ス閫門輯睦シ家道亦興ル洵ニ奇特トス仍テ明治十四年二月七日勅定ノ緑綬褒章ヲ賜ヒ其善行ヲ表彰ス

●中學校師範學校高等女學校教員檢定試驗委員會

文部省にてはこたび第十回中學校、師範學校、高等女學校教員檢定試驗を執行せんとて、文部省内修文館にて、委員會を開き、菊池理學博士、山川理科大學長、島田重禮、矢田部良吉、櫻井錠二、南條綱紀、後藤牧太、寺田勇吉、井上哲次郎、神田乃武其他三十名の諸氏出席し、試驗問題及執行に關する取締法等を協議せしよしなり。さて試驗は、この四月の末つかたなるべしときく。

●活動幻畫　は、今、東京、大坂の各地に於て、嶄新なる發明として盛にもてはやされつゝあるものなるが、此の發明者として街に喧傳せるもの二あり、何れも理學博士にして、一は米國人エヂソン氏の(原名ブアイタスコープ)と、一は佛國人リミエル氏の(原名シネマドグラフ)となり。そて、その先後、將た眞偽は、何れを何れとも知らず、されども、其の仕掛は、兩者大差なく、細微なる數多の硝子撮影板を組み合せたるものより成り、之を電光、又は燈火によりて、現影の運動する樣をあらはすなりといふ。汽車の進行し馬車の馳驅する樣、或は人馬の絡繹たる都府、水烟をたてゝ進航する滊船等、ありの儘に認め得べく、殊にをかしきは、遙にすなけぶりたてゝ駈け來る騎者の己の前に過ると思はるゝが如き、又、夫人の小兒に戯れて顔に微笑をもらすが如き、信に其の場に望むが如く、其の人に接するが如き感あるなり。蓋寫影を目前に活動せしめて東西の實況過去の狀態をそのまゝに示すものなれど、恰も寫眞の活動すると全じく。誌畵の如何ほど巧みなるも、之に及ふことなからん。洵に稗益ある發明といふべし。

●女鑑さきに、米國婦人の元老院議員撰擧に競爭するものを擧げて、驚くべき怪報とせり。女學雜誌之を評して、余りに驚き過ぎたりといふ。吾人は、女學雜誌の驚かざるに驚く、苟くも女子の師表となり眼目となり、正道淑德以て我が國の女風を教ふるもの、此の如を聞く、驚くべき怪事にあらずして何ぞや。蓋、耶蘇教的眼孔には如何に映ずるや、吾人之を知らず。

明治三十年 自四月至六月 女鑑歌文兼題

- 四月
  - 廿日　歌……對花言志　文……臺灣へ出て立つ人をおくる
- 五月
  - 五日　歌……新竹　文……新茶をおくれし返し
  - 廿日　歌……夕水鷄　文……蛙を聞く
- 六月
  - 五日　歌……曉郭公　文……雨中待友
  - 廿日　歌……夏懷舊　文……朝顔



四月廿日兼題　野遊

天　臺灣臺北病院内　杉浦よし子
日は暮れぬいざや小蝶に宿かりて
ゆめのの菫わすも摘みてん

地　愛媛縣北宇和郡吉田町　藥師寺雪子
こゝもよし彼處もゆかし武藏野は
いつこをわけて今日を暮さん

人　廣島市稻荷町　香川頴子
こゝもをし彼處もよしとあくかれて
家路わするゝはるの野遊かな

秀逸（十五首）

つばなぬきすみれ摘む手も面白く　佐々小寧子
野へのあそひに今日も暮しつ

うくひすの花の宿さへあるのへを　木川里子
くれぬと人のなにかへるらん

長閑なる春野にいてゝはなに舞ふ　春永己巳子
蝶とむつれてあそふたのしさ

おもふとち袖をつらねて春の野に　中山嘉壽子
すみれつみつゝ遊ふたのしさ

つはなぬき菫つみつゝはるの日の　吉村ふて子
なかきも志らてあそふのへ哉

うくひすにはなに霞にはたされて　太田貞子
昨日もけふも野へにくら志つ

菫さく野をなつかしみあこかれて　永井さい子
きのふもけふも遊ひくらしつ

花むしろしきつゝねたる春の野に　林久子
くるゝも志らて遊ひぬるかな

思ふどち草のむしろにまとゐして　岸田はつ子
かへさわするゝ春の野邊かな

春のゝたのしき程もみえにけり　大崎かね子
つみしすみれの袖にあまりて

春のひを猶みじかしとけふもまた　藥師寺芳子
心をのへにあそふ樂しさ

たちかくす霞を分けてすみれはな　清末とみ子
摘みつつ遊ふのへののどけさ

けふもまた野への霞につゝまれて　日高かず子
こころ嬉しくすみれ摘むなり

思ふどち草のむしろにまとゐして　戸塚鐵子
心を野へに遊ふたのしさ

ひらきもの心を野邊のはなかたみ　諸井らく子
めにつくものはつくしなり鬼

（以下原稿到着順）

すみれつみ茅花ぬきつゝ思ふどち　住山幾子
のへにあそふぞ樂しかりける

さくら花かさして野へに遊ふ日は　佐々有鄕子
なかしとたにも思はさりけり

のどかなるかすみのそこの野遊は　仁保基子
よそ目にみてもおもしろき哉

ゆくりなく摘み得し草は武藏野の　星野弌子
哀を添ふるもとにぞありける

さきつ頃雪にあれにし野なからも　星野仁子
雉子なく頃のれもしろきかな

ひとつらに野くさ綠となりにけり　星野康世子
ひめもすあかぬはなの下かけ

誘はれて嬉しく野へに來て見れは　遠藤ふじ子
雲雀はたかくきしはかくれて

思ふどちいさうちつれて花とりを　中山富子
みつゝ聞つゝのへに暮らさん

かへるさも忘れはてけり思ふどち　福原菫子
のどけき野邊に菫つみつゝ

春の日を長しといふはかゝる野に　井出壽々野子
あそはぬ人のことぞなるらん

つはなぬき菫摘みにと出しものを　牧山清子
雲雀鳴く野にけふはくらしつ

れのかしゝ袖をつらねて春の野に　伊藤清子
若菜つむころたのしかりけれ

こゝろゆく春の野山はのどかにて　土肥仙子

若菜つみつゝあそふけふかな

蝶をれひすみれ摘む間に暮れに鬼
花かけふみてつきにかへらむ　鳥居　藤子

百千とりさへつる野へに我もまた
くるゝもしらす遊ひけるかな　美奈井よ志子

春の日はわかくされふるのへに出て
あそふろいともたのしかりける　花山やすゑ子

春日野のくさをしとねに戯れつゝ
雲間のひはりきくろたのしき　花山みさを子

すみれつむ野邊に心のあくかれて
かへる家路もわすられにけり　森　野子

思ひきやなかき春日のくれんとは
心も野邊にすみれつみつゝ　森　國子

みなれさをみなれぬ里に迷ひけり
すみれつはなに心ひかれて　吉田きん子

打ちむれて菫さく野にあそふ日は
なかき春日とれもはさりけり　内田とし子

咲きつゝくつはな菫にあくかれて
家路わするゝはるの野邊かな　内田つる子

のへ遠くかすみをわけて辿る日は　羽室　象子

かへる家路もれもはさりけり

糸遊のいとにひかれてはるの日の
なかきもわすれあろふのへ哉　富士村幾子

みやこひと霞をわけてかすかのに
若菜つみつゝけふもくらしつ　春野　梅子

くれぬれと野邊に心のあくかれて
かへる家路もわすられにけり　長山　孝子

鶯にはなにけふしもさそはれぬ
こゝろを野へにあすも暮さん　田島　龍子

つはなぬく少女の聲もれもしろく
旅の野邊ころたのしかりけれ　榊原八千代子

いつしかもゆき消ゑはてゝ櫻さく
野邊の芝生にいさあそひてん　中川みさを子

春の日をみしかしとのみ思ひけり
蝶もわか身もあそひくらして　田中はつ子

一夜さは雲雀のとこをからましや
すみれつみつゝ暮したる身の　田中　壽子

八重垣にかすみこめたる隠れ野は
たかわかくさの妻やこもれる　小町谷りゑ子

鶯のこゑのにはひにはたされて　小町谷園子

うめさくのへにけふも暮しつ

ひはりあかる聲も霞みて春日野は　横田　秋子
すみれつむまてなりにける哉

むらむらに野花摘みゆく少女子の　西元とも子
よろこふ聲を聞くうたのしき

花さきてひはりなくのに思ふとち　羽田三緒子
すみれつみつゝ遊ふたのしさ

こゝろゆくはるの若草とりとりに　河田い之子
野邊のあそひのおもしろき哉

少女子かわかなつみつゝ春の野に　山田　璋子
あそふこゝろははてなかり鳧

鳥うたひ花はゝゑめるはるの野に　仁井田とみ子
かへさわするゝみやこ人かな

梅さくらうくひすひはり芹なつな　高内よね子
とりとりをかし春の野の邊は

今日も又あそひかてらに芹つまん　清家はる子
春野に萌ゆる小くさわけつゝ

はるくれはなもなき野邊も菫つみ　岩城まつ子
つ花さきつゝおもしろきかな

露しけき千草のはなのそれよりも　山本きよ子
かすみはもゆる野邊そ樂しき

少女子か學ひのひまのすさひにと　河野　文子
野へにあくかれすみれつむ也

思ふとちわかなつまむと春の野に　星野　暦子
暮るゝもしらてあそひける哉

思ふとち袖ひきつれてうらうらと　服部すゑ子
かすみの野へに遊ふけふかな

學ひやに通ふかへさに來て見れは　稲葉　露子
かすみの野へに雲雀なくなり

いさやこら岡へにいてゝ若菜つめ　谷川　清子
なかき春日のくれそめぬ間に

糸遊のあそふはるのにおもふとち　青木　糸子
すみれつみつゝけふも暮しつ

春日野にくるともよしや月かけに　西川　順子
野守りの庭のはなもたつねむ

菫つみつはなぬきつゝはるの野に　宮地　琴子
けふも心のあくかれにけり

うくひすの聲のにほひに誘はれて　野中あさ子
けふも野邊にて日を暮しけり

けふも又打つれたちておもふとち　下元もと子

樂しく野遊を分けくらしけり

思ふどちそこ共いはすおくかゝる　上野　君子
のへの遊ひそたのしかりける

鶯のさへつる野へにおくかれて　森山いと子
おかぬおそひに日を暮しけり

長閑なる野をなつかしみ行き歸り　森山　英子
そこともいはすけふも暮しつ

蝶ならぬ身もうかれつゝ樂しきは　小杉　浪子
すみれさくのゝおそひなりけり

春のゝに遊ひくらしぬけふもまた　尾立とみ子
すみれの床のはなれかたさに

霞み立ちのどけき野へに遊ひけり　雑賀らく子
田川につきのかけみゆるまて

春の野にすみれつみつゝ思ふどち　李家貴寶子
おそふけふこそ樂しかりけれ

花鳥のいろねゆかしきおさしふに　綿野利喜子
家路もわすれおこかれにけり

菫摘みつむなぬきつゝとりぐに　渡邊いとの子
くるゝも知らておそふ少女子

春かすみ春日の野遊にうちいてゝ　失　名
遊へるけふはくれすもおらなむ

とひ來ても見よや山田の草の家に　野川みね子
ほころびそめぬ梅のはつはな

打ちむれてひはりなくのゝ摘草は　服部勝美子
なかき春ひもみしかゝりけり

をちこちに若菜つみつゝ家路さへ　西　艶子
わすれてくらす春の野へかな

つみはやす菫つはなにおかすして　大溪　繁子
くるすの小野にけふも暮しぬ

春風にたもと吹かせてすみれくさ　田代　艶子
つみつゝ野遊に遊ひくらしつ

けふもまた思ふ友どち打ちむれて　田代　綾子
すみれ咲く野に遊ひくらしつ

きみは鳥われはこてふよはるの野に　羽田こう子
うたひつまひつけふも遊ひて

思ふどち袖引きのひてはるの日の　武田　環子
くるゝもしらて野へに遊ひぬ

思ふどち野澤のこほり打ちとけて　名取正代子
芹つむはかりうれしきはなし

くれぬるにかへる心もうせにけり　坂田きみ子
花さく野邊にうかれ〳〵て

とふ蝶におくれさきたち遊ふ野に　川崎　晴子
こゝろの憂さをはらひぬる哉

すみれさく野をおもしろみはる霞　近藤ふく子
立ちもかへらす日の暮るまて

思ふとちいさなひつれてけふも亦　三島美佐子
すみれつみつゝのへに遊はん

初若菜つまゝしものとのにいてゝ　佐々木つね子
樂しくあそふけふのうれしさ

長閑なるなかき春日ものにくれは　下田ひろ子
をさなあそひにくらしつる哉

思ふとち誘ひつれて今日もまた　打田いそ子
野邊に遊はんすみれ摘みつゝ

かくはかり樂しき野邊を昨日まて　兼子りゑ子
よりにわすれし我そくやしき

青柳のいとよりなかきはるの日を　仁保志磨子
さくら咲く野に遊ひくらしつ

のへにいてゝおもしろく謡ひつゝ　中屋千代子

鶯のこゑのにほひにさそはれて　有坂　淸子
我れとらしとすみれをそつむ

はな咲くのへに暮しつるかな
おもふとちむつひて遊ふ春の野は　澤田　結子
長き春日もあかすそありける

長閑にも雲雀なく野にあくかれて　小倉　民子
かへさ忘るるゆふくれのそら

をとめ子と共に心をのへに出てゝ　德永萬壽子
かたみにあまる菫をそ摘ひ

打群れて行くうなゐ子に交りつゝ　長田　年子
木のめはる野にあそふ樂しさ

菅の根の長き日かけをうら〳〵と　松岡　濱子
かすめる野へに遊ひくらしつ

春ふかく霞むあしたに宿をいてゝ　鈴木よし子
花をたつねて野へにあそはん

菅の根のなかきはる日を春日野に　林　つね子
すみれつみつゝ暮すのとけさ

青柳のいとのとかなるはるの野は　多賀能利子
あそふ人さへみたれてそ行く

うかれ來ていこふすみれのはな蓆　齋藤　品子

しくものもなき野の遊ひかな

いと柳の長き日すからくりかへし　矢野うめ子
わろへとわかぬ春の野邊かな

いとゆふのいと樂しさに長きひを　北川はな子
のへにいてつゝけふも暮しつ

春の野に親しき友と打ちつれて　田中美津子
あそふけふこそ樂しかりけれ

思ふとちかすみたなひく春の野に　鈴木誠子
わかなつみつゝけふも暮しつ

うちむれて春の末野にわろひては　櫻井りん子
なかき日影もみしかゝりけり

をとめ子か菫さわらひこにみてゝ　玉井隆子
歸るや野邊のすさひなるらん

少女子をいさなひつれて春日野に　長谷川まき子
つはなぬきつゝ今日も暮しつ

花や人ひとやてこてふとわけまよふ　岸清子
春の野へこそたのしかりけれ

何れよりわけて遊はんとり〳〵に　岸せつ子
みるめゆかしき春の野へかな

野をひろみすみれ早蕨つく〳〵し　戸塚文子
つみて遊はんれいもわかきも

長しとも思はさりけりはるの野を　吾妻ちか子
小草とり〳〵あそひくらして

よめなつむ袖さむからぬ野遊ひに　館脇ます子
さくら草さへさかりなりけり

少女子とともに廣野にうちむれて　萩原章子
くるゝもしらす若菜つむかな

いさ今日は友打ちつれて武藏野に　大谷津琴子
心つくしやすみれつみてん

睦ましき友打ちつれてならしのに　大谷津あや子
わかなつみつゝ遊ふたのしさ

武藏野の花のむしろにうちむれて　石川すけ子
歸るもしらすあそひつるかな

鶯のこゑをきゝつゝむさし野に　石川とく子
すみれつむこそ樂しかりけれ

少女子か袖をつらねてはるの野に　植木とよ子
すみれつむこそ樂しかるらめ

むつましき友打ちつれて遊ふかな　植木はな子
春日の野邊にすみれつみつゝ

長閑なる野邊に交りてけふもまた　小島ろく子

つはなぬきつゝ日を暮しけり

乙女子か若菜つみにとうちむれて　佐野　貞子
うたふ聲さへのどけかりけれ

乙女子か袖ふりはへてわかなつむ　高橋菊枝子
のどけき野邊となりにける哉

をとめ子か心のどかにけふもまた　佐野　翠子
わかなつみつゝ遊ふのへかな

四月五日兼題　養蠶

天　筑前國嘉穂郡飯塚町　林　久子

こかひのわさは、古き物の本にも見えたれは、ふるくより此わさの傳はりしものならんか。されと、よのひらけゆくにつれて、其のやしなひかたもくはしうなりて、今はこかひせぬさとなきまでになりぬ。されは、生糸、おり物、眞綿なとも、いとよういできて、あまたの人にもてはやさるゝのみならす、我國より海外へ輸出する品のうちにて、まつれよひをかゝむるは、此蠶かひの業の光になむ有りける。されは、このわさに心をつくし、いよいよますます、我が國を富まさまほしうなむ。

地　大阪東區横堀二丁目百三十九番屋敷　岸田はつ子

明けく治まる御代のたのしさは、萬づの事、よくととのほりて、居ながらにして千里隔たれる所の物も手に入るのみならず、限りなき汐路隔てし外つ國と交りて、貿易といふ事の起りてより、彼の物は我に入り、我の物は彼に入り、益々便りよくなれり。されは、我國より輸出する品も、あまたあるが中にも、生絲を第一とすとぞ。抑こかひの道は、神代より始まれる事にて、代々の帝も、いたく此道をすゝめさせ給ひ、しきりに詔して、いよよ勵ませ給ひ、かしこくも后の宮を初め奉り、數多の宮ひめに至るまで、自ら桑をとりて養ひ給ひきとなん。さりけれと、末々の民とも、いよよ益々勉め勵みて、遂に今日の基を作りけらし。斯て産物としては、多くは、生絲とし、あるは蠶紙として、年毎に盛に輸出すとなん。誠に我國の物は、他し國にたぐひなきよき品なりとて、いたくめでうつくしむとかや。神のかかる貴き御わざを敎へ給ひしも、末なかく御國をとまし、民を利

せんとの厚き御心ならまし。思へど、いと畏こくなん。されど、ますく\此業を盛にして、御國の富を計るへきなり。后の宮すら、貴き御身にて、猶斯る御わざをせさせ給ふなるを、いかで、つとめ勵まさらめや。やよつとめよや、我御國の友よ。やよいろしめや、我はらからよ。

人

熊本市新屋敷町二百廿九番地堀方　木川里子

かひこは、神代の保食神の御躰より傳へ來しなれど、世の中に生としいける人々は、一日もあらでかなはぬ衣をまつらふべきものなれど、代々の天皇、大御心をこかひの業にそゝがせ給ひ、ことに雄略の御門は、きさいの宮に仰せて、かしこくも御手づからかはしめ給ひて民草にもいそしませ給ひしかど、其道もいとよく進みゆきて、つひには手引の糸もて、から機のうるはしきあやをも衣のぐ大和錦に織りなし、皇國人はさらなり、外國人にも、こよなうめてはやされ、今は日本の國つものの第一とぞなれりける。されど、かけまくもかしこき　英照皇太后の宮にも、青山の御所内に桑園を設けさせ給ひ、御手づから其葉をつませたまひて、やんごとなき御あたりの人々にもすゝめさせたまひしと承るにつけても、我等ごとき賤女、いかでいそしまでやあるべき。實に、古今のかはりなく、田つくるいとなみにつぎて、いとく\たふときは、養蠶の業になんありける。

（以下原稿到着順）

山口やす子

我が日の本は、地球の中帶に位し、氣候和らかに、土地肥え、從て殖産多く、殊に蠶を養ふには、極めて適當の國土なり。うべなり、養蠶てふものゝ、遠き昔し、九重深き雲の上に始め給ひてより、次第に世の人に、わりがたくといと珍らしきものなりと知り、身を委ぬる人の多かりしは。とりわけ明治の御代に至り、假にも盛になり行き、深山の奥、津々浦々の住人まで、大概は之を爲さゞる所なし。實にめでたき業ならずや。去れど、之をこよなき事業として、をのこめのこ等が、生活の便術ともなし、幾千萬の竈の煙も、爲めに賑しく、さてそこはぐるしき木綿の衣に更へて、柔なるうつくしき絹衣を身に着ることとをも得るになん。まして、今は外國交易品の第一の

位を占め、其繭より糸を操り出すが如く、年毎に外國に輸出して、人の富むに從ひ、國の光りもいよ〳〵まして、日に月に榮え行くこそいみじけれ。凡て人の情慾は限なし、昔し漢國の人は、隴を得て蜀を望むと云はれしが、能く人情を穿ちぬと謂ふべし、萬の物、此理にもれず、彼の劒の如き霜風より、長閑なる春に逢はゞ、ゆたかに覺え、別に望もなかるべきに、猶あきたらず、難波の梅、吉野の櫻を見ん心を起し、さえ渡る眞如の月を見ても、亦足りぬべきならんに、須磨明石の十五夜の景色をがなと思ふものなれど、木綿より絹衣と思ふは、人慾の免かれぬことなるべし。此をもて、人の生活の度は、益々高く進み行き、生糸の需用も益々多く、今日の供給にては足るべしとも覺えず、去れど、人は愈々此事業を勵み、政府はあらゆる手を盡して奬めらるれど、行々は、如何なる程度まで盛なるや、え知られざるべし、眞に生糸は我國の至寶にして、養蠶は、人の宜しく爲すべき事にこそ。

花山やすえ子

世の中に、人と生れし上からは、己が身にふさはしき業務のなくてやは。されば、やんごとなき姫たちにもせよ、唯いたづらなる娛樂を戒めて、世の中の業務てふ事を盡し、世に甲斐ある人と賞め稱へられんことをこそねがはまほしけれ。畏けれども、此度御かくれましませし英照皇太后陛下に於かせられては、青山御所に御手づから蠶を養ひあそばされしとかもれ承る。こを承りては、誰か淚にむせばざる人あらん。さるを、妾等臣の身として、いかでかいそしみはげみて、蠶を養ひ、國恩の萬分の一たりとも報い奉らでやは叶ふべき。殊に蠶を養ふには、女子の力に適ひて、何處にもあれ、いかなる家にもあれ、養ふことの得るは、此上もなき能き業務にして、其利益たるや、我が國より外國々に對ひて、貿易品の第一等に算へられ、實に少なからざる利益なりけり。されど、我が國を富ますの一助とも成り得ることは、あまねく人々の知り得る處にしあれど、妾が今此處にものするまでにもあらず。頃しも養蠶の期に至れど、妾が感を誌すになん。

名取正代子

こがひは、裁縫につぎて、女のつとむべき、いとも

ふさはしきわざの一つになんありける。されど、いにしへより、かしこき御わたりにても、御身みづから、桑もぎ給ひて、蠶を養はせ給へりと、もの丶文にも見えたり。さるを、まして、よのつねの女として、これを忘らずてあるべきか。されど、近き頃より、それの學校にても、まなびの暇に、こがひのわざ、をしへらるとかや。げに女のよきたしなみともなり、又身體の上に、よきほどの運動ともなりぬべし。とかく、女は内を守るといひて、家の内にのみこもり居れど、事もなくて、日ねもす坐し居らんは、かへりて身體のためによろしからず、養蠶などの、ふさはしき運動こそ、あらまほしけれ。かくてよき生糸をつくり、さかりに外國にたくりいだしなど、いかに皇國の富ともなりなまし、今や我國五重産の一として、たゝへられ居るも、此後ます／＼つとめはげみて、年に月に日に、實に、盛になさまほしくこそ。

坂田喜美子

こがひのことは、かしこきわたりにても、れ手づからせさせ給ふとかや、これ裁縫のわざと共に、女の身にいともふさはしきわざになんありける。我が甲斐の國にては、市中には、さのみ多からねど、其他の村里にては、いたる所此わざせざるはなく、いと／＼盛なり。長野、福島、群馬、神奈川、岐阜、山形などの、もろ／＼の縣にても、此わざ盛なりと、いとも／＼うれしき事になん。ことに、我が國は、氣候もこがひにいとふさはしけれど、ます／＼ふるひて。此わざを盛にれこし、さかりに外國にれくりいだして、以て皇國の富をはからまほしうなん。

佐々有鄰子

こかひのわざは、神代のむかし、保食神のまゆより、生りしものから、歴代の天皇は、皇后に御さとしありて、養蠶のみちを、彌ひろらになしたまはんの大御心持て、外國の漢人呉人などをも召さげ絲しめ給ひ、桑園をひらき、織縫のわざをもはじめたまひて、天さかるひな人も、内日刺都にも、生糸のうるはしき光を、西洋の國人にめでらるゝまでに、みさかりになさしめ給ひしは、ひとへに皇神たちの、厚き恵みのたまものにてぞありける。はげめよや、刀禰、男女たち。つとめよや、東西の國人たち。

墨

女子高等師範學校
宇佐美はる子

するまゝに、こくなる色を見る時は、まなびの道もかくこそと、思ひしらるゝわざなりけりと、むかしの人のいひおきしがいとあはれにて、まゐらするになむ、朝夕の友とも見たまへかしなどいひて、人の得させたる墨は、もろこしよりやわたりけむ、いと見なれぬさまにて、すりいづるに、香さへなつかしければ、一日二日はまたなきものにてはやしつれど、あやしき硯のくるしげに、筆さへおくるゝこゝちせられて、なほはじめの心やすさにはしかずとて、あひなく文机の上をばさらせしかど、人のなさけもむなしくなりぬ。はるかに品下り、石などまじりたらむだに、人のものかゝむをりは、まづとりいでられて、いと時ゐがはなるを、ましてかばかりのもの、もし文學の士にあはゞ、ふみの林、ことばの園にもさきいづべく、書畫のひじりにあはゞ、かぐはしきあとを、末の世までも傳ふべく、たとひ身は硯の海にはてぬるもなか〳〵うれしからましを、月ごろかへりみる人もなき手ばこの底にうづもるるぞ、かしこきひとの、其才を用ゐむにところなく、山路の露にこけの袂をぬらしけむ、むかしのさまにも思ひよそへらるゝや。あはれこのすみの世にいでむは、いつの時にかあるらむ。

墨

女子高等師範學校
成田よつ子

あはれ一枝の筆よく、香ぐはしき名を、後の世に傳へ、あるは、千里の外にも、人の心を通はすになん。されどこの千代もかへぬ竹の柄も、常盤なる松のけふりにて造るてふ、墨のあらずは、如何せん。されば、墨は、一日も欠けてはあるべからず。まひて、日毎に、教の庭に物學びするものは更なり。古の世にてかきの上手と、たゝへられし人も、此墨のありたればこそ、外つ國までもめでたき名を、とゞめけるなれ。實に墨は、世の中にたふとかりけるものといふべし。と、かきつゞくる折から、墨のおのが事、記さるとも知らで、かぐはしきかをり、おくりぬるも、折につけて、いとつき〴〵しう、あはれに、覺はゐてなむ。

皇太后の宮の崩御をいたみ奉りて　川崎晴子

人皆のこゝろくみてやきのふけふ
天つみ空はくもりかちなる

かしこくも皇太后陛下の御大葬の
御かたを新聞紙にて拜み奉りて　河野文子

み車のうしにもしかしよそながら
谷のうぐひす音をのみぞなく

芦間鶴　春永己巳子

千年へん影さへ見ゑてなにはゑの
芦間にあさる田鶴のゆたけさ

梅香移柳　諸井くら子

梅が枝にれくしら露のちるごとに
ならふ柳もうちかをるなり

養蠶　西川順子

見せはやな都の人にしづの女が
つゝれまとひてこかひするさま

初春懷舊　錦織ちさ子

あさかすみたなびきわたる階に
むかしの春もしのばるゝかな

若菜　日高かず子

忘れしと思ひしこともわすれつゝ
わかなつむ日ぞ樂しかりける

松影映水　野川みね子

としぐ〜にみどりそひ行く老松の
水にうつれる影ぞゆかしき

松影映水　前田菊千代

かゝみなすよさの海つら風なぎて
なみぢにうつる松のむらたち

櫻花　松浦てる子

てりそはるくにの光ともろともに
いよ〜かをるやまさくら花

花を見て　矢島ねい子

さく花の匂ひはゆかししきたへの
袖にうつしてとゞめれかまし

社告

拜啓益御清健奉賀候引續き御引立を蒙り辱く深謝仕候陳は今回會計主任者左記の者に變換致候間爾後は乍御手數金錢御受拂の事は勿論會計上の御用は必下名の者へ御宛被下度此段得御意候草々敬具

國光社會計主任
澤邊祐順

明治三十年三月

國光社

黒川文學博士序○東宮鐵眞呂先生編

教科適用 **宇治拾遺物語抄** 上下二冊○定價郵税共金五十錢

東京府高等女學校を始め各所の中學女學校の教科書に採用せらる國文を學ぶ者の必ず見るべき書なり

東宮鐵眞呂先生編 **語格要覽** 一折定價郵税共金十五錢

日本文法の格法を一目の下に見るべき至便の書なり

東京市淺草區小島町五十七番地 國風會

生田目經德著 **雅文消息集** ●定價金二十五錢●郵税金四錢●郵劵代用一割増

富士谷御杖大人 **土佐日記燈** 大和綴美本 近刊

杉谷正隆編 **修身百首** 全一册 近刊

發行所 東京市京橋區築地二丁目二十一番地 國光社 （電話番號本局八八）

女鑑第百貳拾九號目録

（明治二十四年八月八日内務省許可）
（明治廿五年三月十二日遞信省認可）

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京銀座郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若強ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

毎月五日廿日發行

定價			廣告料
一冊	六冊（三ヶ月分）	十二冊（半年分）	五號活字廿三字詰一行金二十錢
十錢	五十五錢	壹圓	
全國無逓送料			

明治三十年四月十八日印刷
同　年四月二十日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼印刷人　川崎直衞
同　編輯人　山根勇藏
同　發行所（電話番號本局八八）　國光社

（印刷所　東京國光社印刷部）